スムイタートゥー

第五卷 十日号

東日スムイタ社

十月新譜一覽

浄瑠璃時雨の炬燵（一段八枚）豐竹駒太夫 糸鶴澤才治（一枚）

浄瑠璃新口村 糸竹本錦太夫 豐澤新左衛門

江戸小唄きりの 雨柳（一枚）美之助

新地唄茶音頭（二枚）あい豆

哥澤枯野ゆかしき（一枚）富士や浅間 唄芝鶴代

稽古用長唄汐くみ（二枚）竹屋登美

三絃童謠觀音様のおびんづる 鼓（一枚）糸唄森きみ子 竹屋六喜

小唄博文句入磯節（一枚）神戸共立檢 ミん八

小唄館びんぼつ替節唄（一枚）山 南地力松

小唄二上り新都々逸、木遣内（一枚）葭町象松

小唄宇ら治さき柴（一枚）一井かつ

萬歳滑稽玄冶店（一枚）芦の家玉雁 初春亭輔玉

法界三十三間堂（一枚）小原節 新之助連

浪花節山城屋和助と藤田傳三郎（一枚）京山若丸

浪花節南部坂（一枚）桃中軒如雲

浪花節天一坊（一枚）浪花亭綾太郎

浪花節大石山鹿護送（二枚）天中軒雲月

落語袈裟茶屋（二枚）桂春團治

觀世流謠曲杜玉（一枚）若葛生一左兵衛

書生節最後の金色夜叉（一枚）松の 笛大 小森太

童話文福茶釜（一枚）兒童レコード協會 寺井金春

童謠青い鳥、母さん里泊り舟、夏の鶯（一枚）ミチル學園 小橋みち代

童謠お祭、お地蔵、達磨店（一枚）盆 野澤照子

ピアノ舞踊會の招待（一枚）パウル、ショルツ

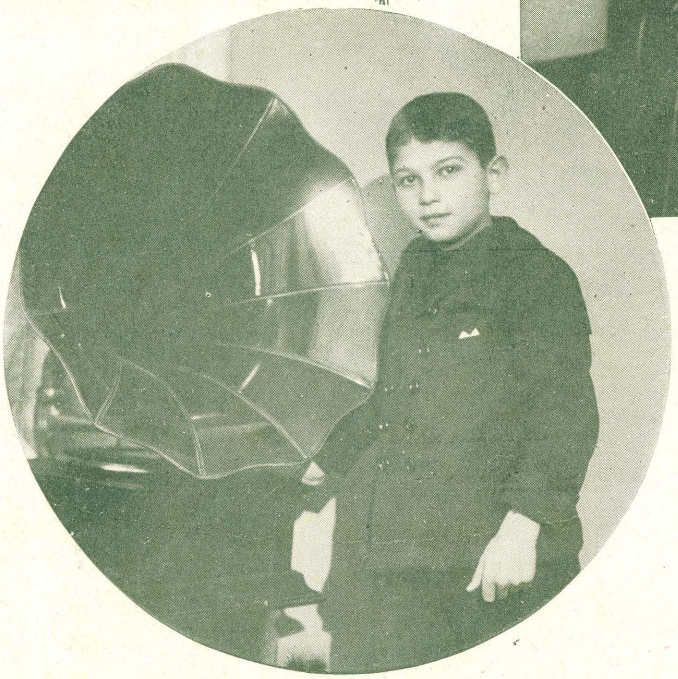
Des Schwarze Domino, Marche des Mandolinistes.（一枚）

ヴアキオリン トーリア ポッパ

ツバメ印ニツトーレコード

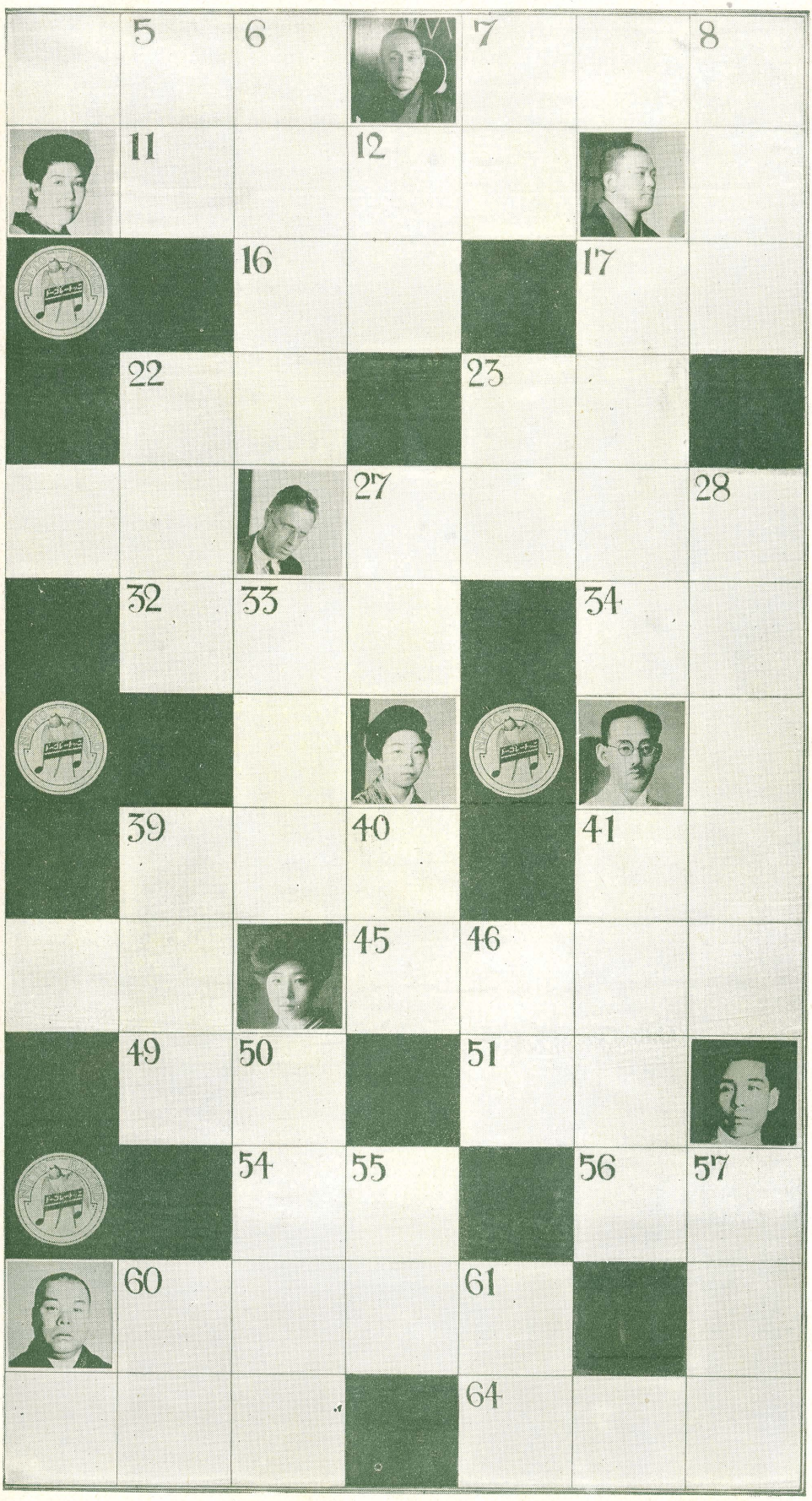
今は氏ツルヨシ
意得も最の氏度
ピンイるれさと
ルワンヨシイテ
レートツニをツ
ま込吹にドーコ
たしまれ

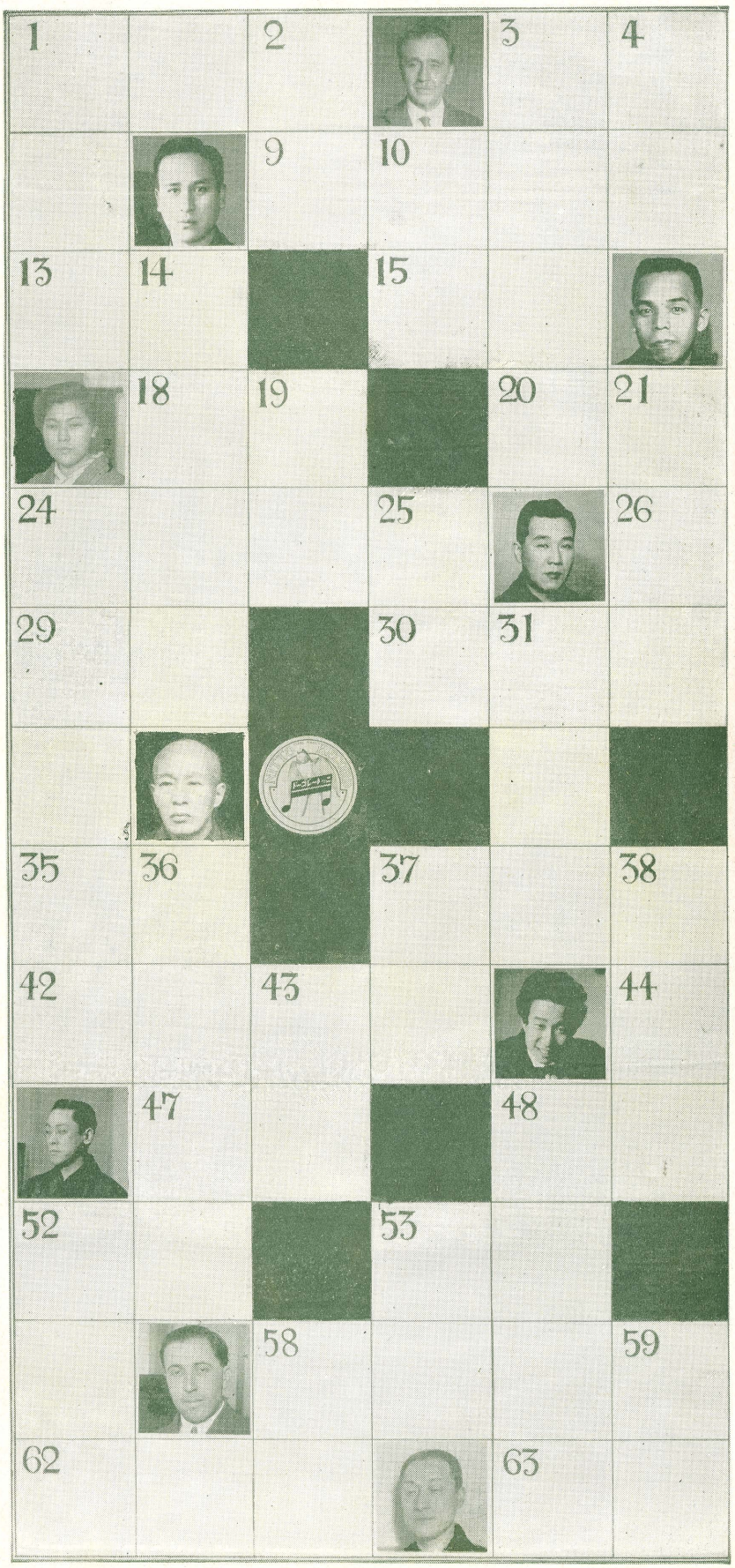
可愛らしい三絃童謡の
吹込者　森きみ子嬢



天才的少年提琴家トーリヤポツパさん

懸賞クロスワード!!!


5
6
7
8
11
12
16
17
22
23
27
28
32
33
34
39
40
41
45
46
49
50
51
54
55
56
57
60
61
64



タテノカギ

1 百合科植物
2 沖縄の地名
3 風の吹く方
4 オバシマ
5 土地の狀態
6 汽車の辨當
7 維新三藩の内
8 女の沈む所
10 革のお化
12 船に付くもの
14 謠曲の名人
17 義太夫の名人
19 春日神社の使
21 文樂座で美聲の若手太夫
22 卑しき僧侶
23 鎭火
24 共立檢の美聲
25 臣
27 エンゼルの使
28 命
31 大菩薩峠の机
33 文部省英語教
36 授顧問
37 清元の名人
40 稽古用長唄レコード吹込みの師匠
41 聲樂家水野
43 片びいき
46 あわび
48 赤い章魚
50 口論する
52 新國劇御大
53 季節
55 四方海
57 大阪の落語家
58 夢を食ふ獸
59 壁の中
60 艸の高木
61 とりで
38 鎌腹
39 一陽來復

ヨコノカギ

1 犯罪の裏
3 マンドリン大家
7 ラヂオで問題の東京落語家
9 講釋界の名人
11 日本一の美聲妓
13 朋友
15 刀劍の一部分
16 鈴
17 人を惱ます曲者
18 年
20 神前の踊子
22 10000
23 8+1
24 往時
26 竹刀
27 長良川
29 天子
30 京都
32 間諜
34 甲乙丙丁
35 末
37 一六銀行
39 西洋料理の野菜
41 滋賀縣の地名
42 あらためる事
44 ハモニカの名手
45 江戸小唄の名人
47 ことがら
48 歸る反對
49 帝王の醫者
51 口腔にあるもの
52 白湯
53 地味の反對
54 計器
56 妻の俗稱
58 ピアノの名手
60 浪花節召集令
62 家を造る人
63 長唄の名人
64 おごす

締切 來る拾月廿七日正午

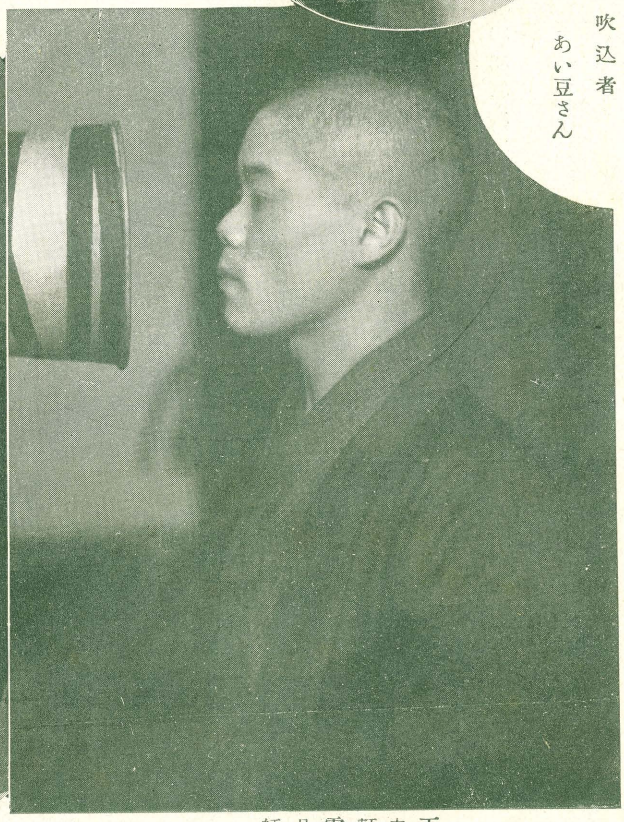
宛名 大阪市住吉區上住吉町神社南門前日東蓄音器會社クロスワード係

應募規定 本誌第一頁にあり

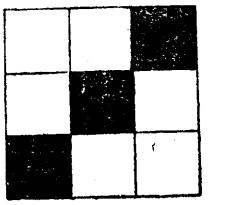
宇治柴と むらさきを吹込む 一井かつさん

『新じうた』の
吹込者
あい豆さん

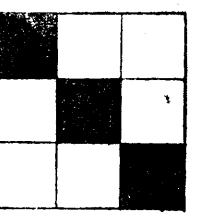
桃中軒如雲師



天中軒雲月師



懸賞クロスワード



賞品

一等　ツバメ號テーブル型蓄音機（一臺）定價四百圓（一名）

二等　ツバメ號一號蓄音機（ニットーレコード黒十五枚赤針一千本）一臺　定價百八拾參圓五拾錢（二名）

三等　日東號四號蓄音機（ニットーレコード黒十五枚赤針二百本）一臺　定價百拾參圓五拾錢（三名）

四等　日東號三號蓄音機（ニットーレコード黒十五枚赤針二百本）一臺　定價九拾八圓五拾錢（四名）

五等　日東號二號蓄音機（ニットーレコード赤十枚針二百本）一臺　定價六拾九圓五拾錢（五名）

等外（甲）蓄音機針（百千名本）

（乙）蓄音機針（五百二百名本）

應募規定

一、鍵の寫眞はニットーレコードの專屬吹込藝術家であります。

一、答案用紙はツバメ印ニットーレコードを販賣する全國各蓄音器店にて無料で贈呈しますから必ずそれを御使用下さい。

一、應募には必らず處定の答案用紙を御使用願ひます夫れ以外のものは絶對に取りません。

一、答案用紙は何れも明瞭に記入して下さい。

一、宛名大阪市住吉區上住吉町神社南門前日東蓄音器會社クロスワード係。

一、締切は十月廿七日正午。

一、入賞者は正解者に限ります。

一、入賞者の等級は抽籤に依り決定致します。

一、入賞者は十二月號の本誌上に發表致します。

一、答案には必ず「ニットータイムスに依る」と記入して下さい。

目次（第五卷第十號）

名人傳清元延壽太夫　新井六九二
レコード夜話……長尾仁哉　四
俊寛に就て……齋藤香村　五
淨瑠璃時雨の炬燵　豐竹駒太夫　六
童話　文福茶釜
涙花節山城屋和助と京山若丸　八
涙花節藤田傳三郎　京山若丸　八
浪花節南部坂……桃中軒如雲　八
涙花節大石山鹿護送……天中軒雲月　九
涙花節天一坊……涙花亭綾太郎　九
小唄集……一〇
レコード文句集……一一
聽音記新聞……一三
落花集……一四

名人傳

清元延壽太夫

新井六九

三

近頃の或る日。

延壽太夫と、高弟のX太夫とが、高輪の閑雅な延壽邸の一室に對座してゐました。延壽はいつになく大變不愉快そうな顏をしてゐます。

『御前は、もう弟子をとつて人へ教へる程の藝だと思つてゐるのですか。わしから云はせればまだほんのなまりがなほつた位のもので一人歩るきの出來る者とは思はれない。まだ〳〵修業時代の大切な時ですよ。人に教へる暇があつたら、自分で一段でも多く唄ふことです。教へるなどゝいふ心が大體藝の行詰りではないか』

『は』

『まあそこで、御愁傷さまです、と云つて御覽』

『御愁傷さまです』

『お目出度うございます』

『あ目出度うございます』

『——いけない、いけない、二つともいけないよ。御愁傷も、お目出度う、も口先きだけのことで、お前はそれを工夫して云つたことがないね。實際葬禮の場へ行つた時や、婚禮の式に出た時には、たゞすらすらと云つても、それが周圍のまあ刺擊といふやうなもので、眞に迫まつた言葉が出るが、われ〳〵がたゞ語る時には、そう不用意にやつちゃ仲々本當に御愁傷や本當のお目出度が氣持に出るもんぢやない。まあこの工夫をして、御愁傷さまと云はれて、わしがそれに釣り込まれて、ほろりとなるやうになつたら教へる事を許しませう』

こうして弟子をとりたいからといつて來た太夫は言葉を次ぐことも出來ませんでした。

延壽太夫は、直門下の者が弟子をとることを許しません。事實は、內所で教へてゐる人もありますが、それが延壽に知れると大變なことになるのです。そして自分は、決して素人には教へないことにしてゐます

『わしの苦心が、旦那藝化されて、後の世に誤まり傳へられるのがいやです』

とこう云ふのです。そして、一旦門下としたものには、先づその唄の意味から文句迄すつかり說明して納得させてからでなくては、唄ふことを教へないのであります。

◆

ある日「保名」を教へてゐました。

『こゝに素袍袴といふのがあるね、これはね、わしもよくわからなかつた、素袍と袴といふことか、それともすはう染の袴のことか、とこう思つてね、古いことだが幸堂得知さんに賴んで調べて貰つた、そしたら結局が、素袍袴といふのはむかし長袴のことをこういつたものだと判つた。そのつもりで語らなくちゃいけないよ』

一寸こう學校の教室へでも行つてゐるやうな氣持がしました。

◆

延壽はよく云ひます。

『人に教へるには、極く正確に正確にとやられば、遂にはその藝道を誤まるやうになります。少しでも道樂節、つまり變則な節を入れますとね弟子はすぐにそれをとるんです、變則といふものは變つた味があつて延々して面白いものですから人情としてこれをとるのです。そうして、最後には變則から變則と行つて、一體本筋のものはどれだつたと、本則を探さればならないやうなことになりますからね例へば「忠信」とか「淺間」とか、硬い中にも軟か味のあるものは、その硬い味だけを教へて、軟か味は、これつぽつちも見せないやうにするんです、そして硬く教へ込んでから、軟か味は銘々に出させるやうにするのですが、こゝで少しでも軟かい味を見せると、みんなその方ばかりとつて終つて、ぐにや〳〵の「淺間」が出來たり「忠信」が出來たりします。本當に教へるのは大變です』

◆

延壽太夫は、清元の家元として、一世の名人と云はれてゐても、毎朝、朝日と共に起き出でゝ、深呼吸をやつてから、未だにアカサタナとイキシチニを、精一ぱいの聲を出してやるのです。そして聲を極度に下げ、また極度に上げ、自由に喉を使つてからでなくては、朝の食事はとりません。

六十を越へ、巨萬の富を積んでも、延壽は矢張り修業時代の氣持、清元に對する絕えざる研究をつゞけてゐるのです。

『わしも時にはどうにも節のつかないことがあります。こういふ時に思ひ出すのは五代目の菊五郎です、わしにとつては大の恩人で、お前はなまじい俺に合はせやうとするからいけねえ、自分は自分の好きな通りにどん〳〵とやんな、舞臺は俺の方で合はせてやる、何んでもお前の呼吸さへ本當ならそれで藝はぴたりと來ると教へられました、よく氣のついた偉い人でしたよ、わしも當時若いながらに、五代目のいふことは一々びし〳〵と腦に

こたえましたよ。この呼吸さへ本當なら——といふ言葉、これが藝道の極致ですそれさへしつかり握つてゐれば、どんなに節のつかない時でも、次第に光を見出すことが出來るのですよ』

◆

延壽は、酒と酸味の強いものは成るべく避けるやうにしてゐます。そして日常、砂糖分の多いものと、葛湯などを用ひてゐる上に、寸暇を得ればすぐに伊豆の伊東の別莊へ行つて靜養してゐますが、それは伊東の空氣が延壽の喉にはぴつたりと合つて、一週間も滯在すると、われ乍ら驚く位に、元氣溌溂として來るのだそうです。

でも延壽は、

『聲の養生なんて、別に大してやる必要はありません。修業さへ充分にして、毎日の心をこめた稽古を怠られば、酒を飲んだとて酸つぱいものを喰べたとて、何んでもありやしませんよ』

と云つてゐます。

四

延壽太夫の名調をレコードに殘したいと各蓄音器會社が、猛烈な競爭で、彼の邸へお百度を踏んだ物凄い有樣は、最後に日東蓄音器へ吹込みとなつた時に、その自働車へ護衛の巡査が乘つたことでもわかりますこの吹込みの交渉には、各會社とも延壽の本當の心持ちを知らないで、只金錢で物事を取極めやうとするのが、ひどく延壽の氣嫌を損じ、

『わしの藝は金に勘定は出來ません、賣買の出來るものではありません』

と、頑として應じなかつたのですが其處へ飛込んで、行つたのは、日東の森下專務で

『わたしはあなたの吹込をやつて儲けたいのと、も一つはあなたの聲をレコードに殘して、將來、清元といふものはこういふものだといふ事を手本にしておきたくてやつて來ました』

と持ちかけました。森下專務の交渉も掛引なしの眞劍なものですが延壽はその交渉がひどく氣に入つて

『よろしい、ではやりませう、だが條件がありますよ』

『どんな條件でも承知しませう』

『いや面倒な事ぢやありません。吹込んだそのレコードを私がきいてみて、少しでも氣に入らぬことがあつたら、斷然やめますから』

『いや承知しました』

こうして間もなく延壽は日東の吹込室へ入つたのです。

森下專務は云ひました。

『家元、そのあなたの座つてゐる臺を唄つてゐる最中に私もあなたの聲に從つて、前へ出したり、後へ退いたりして、調節しますが、驚かないで下さい』

『森下さん、わしはね、いざ唄ひ出したとなれば、一段完全に思ふまゝに唄ひ終らない中は、例へ家臺骨が崩れて來たつてびくともしないんです。臺なんか動いたつて、恐ちく語つてゐるわしには、わからない事でせう』

延壽太夫は、ぽんと森下專務の肩を叩いて吹込臺に座はりました。三味線は伴榮壽太夫です。

『榮壽、お前はわしにかまはず精一ぱいに彈け。良いか』

『はい』

『いつも話してきかせる五代目音羽屋の敎訓を思ひ出せ。呼吸さへ本當なら——お前の精一ぱいの力で彈け。たゞ一心に彈けよ』

『はい』

『この一段が本當に完全に殘されたら、わしもお前も昨日が日死んでも藝人としての本望だぞ』

『はい』

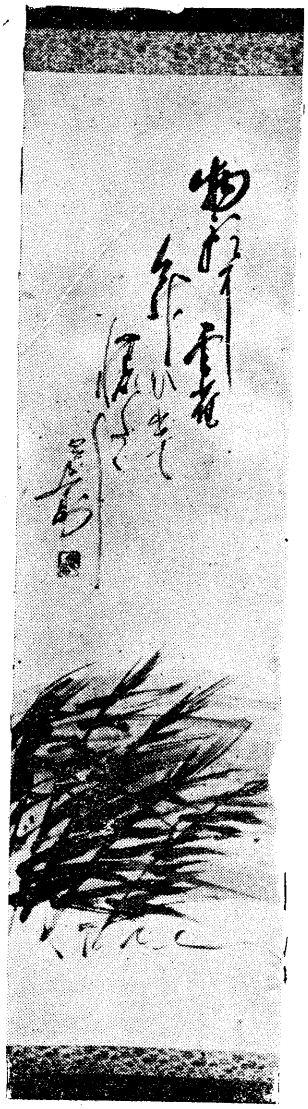
榮壽は泣いてゐました。延壽の眼にも涙がありました、森下專務も泣いてゐました。

やがて生命をこめた榮壽の三味線が鳴ります。延壽の一代の名調

『かされ』は

はじめられたのです。

——終——



清元延壽太夫の揮毫

レコード夜話

日東名物レコード

小唄人名の唄

赤坂の田村師匠と美之助の江戸小唄

長尾仁哉

小唄の生命——、それは即興的な氣分の澎湃してゐる中にまた云ひ知れぬ一脈の情緒と風情が纏り合つて渾然つきぬ情趣を偲ばせる處に眞に味あふべき小唄そのものゝ捨て難い妙味があるのです。

殊に江戸前の純粹な小唄に於て、最もその味あふべき情趣が深いやうに思はれます元來此の江戸前の小唄は「はやま小唄」と稱されてゐますが、最近蓄音器のレコードに吹込まれたものには「はやま小唄」とは云はずに新らしく「江戸小唄」と云ふ名稱が付けられてゐます、そこで私はレコードに吹込まれた「はやま小唄」が殊更に「江戸小唄」と名付けられた事から話を初めようと思ひます。

抑々はやま小唄を江戸小唄としたのは、日東蓄音器の專務森下さんで當時、それは丁度昨年の春のことでした、小唄ものゝレコード製作に可なり行詰りかけてゐた日東では（尤も何處のレコード會社でも此の種のものには行詰りの形です）何んでも新機軸を生み出して從來のありふれた小唄に飽々してゐる人々をアッと云はせるやうなものを拵えてみたいと色々趣向を目論んだものですが、却々アッと云えるやうなものは見付からなかつたのです、其處で森下さんも隨分考へ拔いた揚句に到頭、純粹の江戸前の小唄——はやま小唄——に白羽の矢を立てたのですが、是を從來の儘で踏襲する事は面白くないとあつて、所謂森下さん獨特の鳥渡人には眞似の出來ない大膽な趣向を加味して表現する事になりました、と云ふのは元來この小唄の三味線は爪彈でなければならないものを、撥で彈く事にしたのです、だから泌んみりした情緒的な小唄を本位にして、それに爪彈の粹な根締でより一層唄の値打を引立たせようとする小唄の本來から云へば、聊か約束に會はぬことになりますが、世間には往々にして事實が約束事や理屈を超越して現はれることがあります、森下さんの此の試みは見事に圖に當りました、然し此のレコードを圖に當てようとするまでには、森下さんも隨分腦を惱ましたことで、第一此の小唄レコードを單に小唄とするか、それ共正直に「はやま小唄」と名付けるかゞ問題で、恁う云ふと大變業々しい云ひ方になりますが、製作者としての苦心や努力は矢張り人に認められてこそ甲斐がありますが「小唄レコードも陳腐なもの許りだ」と高をくゝられてゐる時に、平凡な名乘りを揚げてみても、それは全く豆腐に鍬程にも刺戟のない結果に終るでせうから、森下さんは內容に自己流を加味したと同時に名稱にも思ひ切つて今までに無い江戸小唄と云ふ銘を打つたのです是が最初で今日では彼方や此方のレコード會社が日東の眞似をして、江戸小唄と稱し追々小唄レコードを拵えるやうになつて來ました。

次に話が稍々前後しますが、森下さんが小唄レコードに新生面を開拓するべく、江戸小唄を拵える動機を得たのは、現在日東に江戸小唄レコードを吹込んでゐる美之助その人を見出して、美之助さんの音樂的素質からヒントを得たもので、即ち吹込者に最も當嵌つた材料が選定されたのです、ですから美之助さんの江戸小唄は正に適材適所であつて日東が美之助さんのレコードを發賣して丁度一年有半その間、毎月缺かさず發表されるレコードが月を重ねる度に益々好評を博しファンの數を增して行くも、强ち不思議な事ではありますまい。

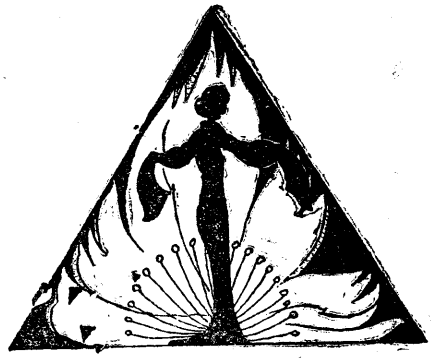
處で最近一般の小唄愛好者間には、從來美之助さんの吹込んでゐる江戸小唄をしてより以上、泌んみりした氣分を味あひ得るものをとの希望を抱く人が多くなり、日東の方へ恁うした註文を寄されるので、森下さんは、數の多い小唄の曲種を選擇する事は勿論、是には恁うしても唄を主としなければならないと云ふので、今度小唄の名人として斯道の者宿。東京赤坂の田村てる師匠を聘して美之助さんの小唄を指導して貰ふことにしたのです、が田村師匠には澤山なお弟子があつて毎日〳〵そのお弟子さん達に稽古をする丈でも隨分忙しい軀なので師匠に態々來阪して貰ふことは隨分難かしいことでしたが、田村師匠も美之助さんの爲にならばと、忙しい軀を特に拔いて過日家弟子の田村てる葉さんと共に來阪、宿屋などに泊つてゐては充分な稽古が出來ないからと云つて美之助さんの家に逗留して、毎日懇切な稽古をする事にしました勿論田村師匠として忙しい處を無理に來たのですから、長い間の滯在は到底出來ません、そこで毎日朝は早くから夜の更けるまで、教えるのも教はる人も本當に血の潤み出る樣な眞劍な態度で稽古に熱中しました、そして僅々兩三日の中に小唄廿數種を完全に美之助さんのものにすることが出來ましたので師匠は人變滿足したさうであります、殊に師匠の驚いたのは、美之助さんの美聲と天禀の才能の豐かなことで、師匠も今日まで多くのお弟子さん達に稽子をして來たが、美之助さん程に短い期間に而も多くの唄を立派に唄ひ化した人には出逢つたことがないと云つてゐました、又美之助さんが上方育ちにも拘はらず江戸生粹の抑揚を見事に唄ひ、少しも上方訛を混じえないと云ふ事

に對しても恥なからず感歎してゐました。

そうして田村師匠は、私が此の次に來る時と云ばず、直ぐ明日にでもレコードの吹込をした方が宜いだらうと云ふので、東京へ歸る日の朝に、美之助さんのレコード吹込をする事になり、吹込の時には師匠も日東の吹込場へ行つて傍から吹込の輔佐をし乍ら、三味線は田村てる葉さんに爪彈で彈かせ、是も稽古の時に優る直摯な努力が拂はれたとのことでありますから、屹度此のレコードは從來のものよりもズット秀れた結果を納め得たこゝ思ひます。

田村師匠

慾張あんばいで美之助さんの江戸小唄レコードは森下さんが最初思ひ付かれた時とは餘程趣も變り精進の歩みを積んで來ましたので、自然に江戸小唄としての純眞さが具えられて來た譯で、今後の江戸小唄は爪彈の泌んみりした糸に連れて美之助さんの乙な唄をレコードで心ゆくまで聞くことが出來るでせう。



第三回番謠音譜

俊寛について

齋藤香村

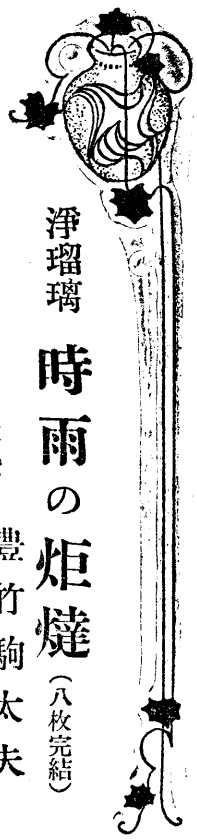
此の曲は九番目ひで重く扱はれてゐることは諸氏が既に御承知のこゝ、存じます、九番としての重さ難かしさは那邊にあるかと申しますと、場面にもシテ、ツレ、ワキ、諸役の心持にも變化が非常に多く、それを藝術的に表現するにあります、處が斯ういふ現在曲は兎角情が露骨になり卑俗に陷り易くそれを避けやうとすれば、無味乾燥になります、すべて謠の難かしさは其點にあるとも云へますが、殊に此の曲に於て痛切にそれを感じます。

此の曲の難かしい點はも一つあります、それは各役の心持がグン〳〵變つて行くことであります。先づ成經と康賴から述べますが『神をいはふか島なれば』とうたつてゐる時に『何々中宮御産の御祈りの爲に』と赦免狀を讀んでゐる時と俊寛に袂に取りすがられた時と、二人が舟に乘つてからと、皆心持が異つて居ます、ワキにしても名乘りと一セイとロンギとキリとそれ〴〵違つた心持でなければなりません

そして此のツレ（嚴密に云へば成經と康賴とは心持に幾分の差はありますが）ワキの此の如き變化ある各々の心持がシテの心持と怎う云ふ交渉があり聯絡があるかを よく考へねばなりません、此の變化に富み且つ複雜な心持が此の曲を重からしむる所以の一であります。然るにたゞシテの心持にのみ重きを置いて他役の心持は餘り顧みなかつたり、又はツレもワキも無闇にシテに同情したりしては此の曲の作意に反するものではなからうかと考へられます、成經、康賴、ワキはワキでその立場の上から各自分の身の上ばかりを觀詰めその主觀のみを持して居ればよいのぢやないかと私は考へます、俊寛に對する同情これも全く沒却する譯には行きませんが、それは表面の同情だけで結構、自分達はもう都へ歸れるといふ喜悅に滿ちて居るべきであります、さうした心持の表現こそより以上俊寛をあはれな者にします、俊寛の悲痛を益々大きなものにします（全曲のシテの心持に變化あることは云ふまでもありませんからこゝには省略します）

以上の如く此の曲を解してゐた私は能や謠で屢々期待を裏切られたのですが、六月十二日に宗家元滋先生の吹込を拜聽して自分の考へが誤りでなかつたことを確め得たように思ひました、何しろこの日の出來榮は實に素晴しいもので、その後に觀た同先生の此の曲の能よりも此の素謠の方が面白かつたのです、そのことは俊寛の合評會でも述べましたが近來の演奏中最も傑出せるものゝ一たることは、誰あつてこれを否定し得ませうか。

× × × ×



淨瑠璃 時雨の炬燵（八枚完結）

吹込者 豊竹駒太夫 糸鶴澤才治

（九）

こは知らずして、治兵衛は手をつき、イヤ御立腹の段は御尤おさんが申すは皆むだ事私心に存ぜぬ事、此まゝ添はせて下されと詫れど聞かず、イヤならぬわい、何にも云ふ事聞く事ないわ、おさん戻せば事は濟む、併し拵へおこせし道具エ、改めて封付んと、立上ればおさんは驚きエ、コレ〳〵父様衣装道具も揃ふてある、エ、モウ改めるには及ばぬ、と駈けふさがれば突きとばし、ぐつと引出し、コリヤごうぢやと一重二重抽斗の數も有るだけ押入まで、底をたゝて五左衛門口あんぐりと明け入物、指すにもさゝれず詞さえ、暫し呆れて居たりける、治兵衛とつくと心を定め、コレ〳〵舅殿、此の五十兩はな、女房おさんが着衣裝道具のかはり、不足には有ふが取つてござれ、エ、オ、ゝホ、ゝチ、ゝそふはかいイヤイヤそふはかい、ウム、ゝイヤ又ごう云ふても……大身代ぢやけのう、アハ、ゝじやがあのしだらを見るからは愈々娘は連れて行く、サ、うせふと引立れば、マ、待つて下さんせ〳〵、モウあゝ云ひ出しては聞かぬ父様、わたしやマア歸ります、云ふ迄はないけれど勘太郎が事〳〵を賴みますぞへ、朝飯前に忘れずとなソレ桑山の丸子呑まして下さんせ〳〵、チ、氣遣ひ仕やんな、が思ひもよらぬ今この仕義、とんと心も落付かねどそんなら暫らく別れて居よ、へ、舅殿も娘の事まんざらむごふもさつしやるまい、ツイ戻りやる樣になるぞいの、アイナ……コレ申し治兵衛樣必ずに短氣の出ぬ樣に、エ、小面倒な暇乞キリ〳〵あゆめと引立つる

（十）

聲に目さますす勘太郎、かゝ樣のふ〳〵を聞き捨に後に見捨つる子を捨つる、籔に夫婦の二股竹長き別れと……、出て行く、しほれ〳〵し後影見送り〳〵小蔭より、小春は内へ駈け入れば、ヤアそなたは此處へマごうしてと尋ぬる内にも稚子が、かゝ樣のふとしたふ子を、見るに二人はいとゞ尚思ひくずをれ抱きしめ、透せばすや〳〵稚子を、いぶりながらがもくごき言。

（十一）

オ、トツトもう何から云はふぞ治兵衛樣、いつぞやも曾根崎で愛想づかしが悲しいお別れ思ひ切つては居るけれどアノ太兵衛に身請しられてはもう所詮生きては居ぬ覺悟、此世の名殘りにたつた一目と來る事は來ても折あしく立聞きした内の樣子、モあれ程貞女なおさん樣にあふぎの別れさせますも皆妾からおこつた事堪忍して下さんせ〳〵さいな、眞實な入譯を聞けば聞く程此身の誤り、モあの樣な女房が三千世界にあろかいのう、此云ひ譯にはそなたも俺も、コリヤこな樣も覺悟極めてエ、忝ない〳〵と抱きしめたる泣じやくり、胸と胸とに云はせけり、高砂や此重箱に餅入れて、片こまじり阿呆の三五郎、机に乗せし三ツ具足、兩手に抱へ二人が眞中サア〳〵〳〵きやうとい物に成たじやないかへ、アノさつきおえ樣の云はんすにはな、コリヤ三五郎よおれが留守になつたら大方こゝへ小春樣がござんす程に、そしたらあの旦那樣とアツアからつと、アノ旦那樣と、ア、ゝさうぢや祝言をさすのぢや、われを賴むテ、、云ふておかんしたわいな、そこで俺が思ひつき、花瓶が松に鶴龜、酒のとつたがなかつたさかいやけど水を銚子に入れてきた、媒人役のエへ、、、俺樣ぢや、

（十二）

禮には好のとらやまんぢゆ、そして今から……阿呆と云はんすなえ、エようどんすか〳〵、サア〳〵早ふ呑んせいのう、アツ何んぢや二人ながら泣んすなコレ泣んすないの〳〵ハ、扱はこら嬉し涙ぢやのう、オイノ、こな樣の云はんす通り嬉し涙がこぼれたわいなア去り乍ら治兵衛樣と祝言してはごうもおさん樣へ、エ、何のまあ濟ぬ事はどざんせぬわいの、おえはんはだしがらになつて是程味い鰹節をお前にやらんす事ぢやもの、志を無足にせずとキリ〳〵呑んでさゝんせいのう〳〵、オ、こりや三五郎が云ふ通り祝言ぢやと思や義理も有るが互に末期の水盃、ウムさらばお酌を申さうかい、涙ながらに取り上ぐる、酒と水とはかはらけの、

（十三）

土になる迄葬禮の一本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいとゞ胸せまり、

童話 文福茶釜

吹込者 兒童レコード協會

夜ぶほのぼのと明け初めました。茂林寺と云ふお寺ではもうお掃除をすつかりすました小僧さん達が今本堂のお佛さまの前でお勤めをしてゐました。和尚さんは奥のお座敷でこの間買つたばかりの珍らしい茶釜を出して見て獨り喜こんで居りました。處が皆さんこの茶釜はお化だつたのです。とは知らないで和尚さんは暖い日差しを浴びてうつらうつら居眠を始めました。お化の茶釜はたいへん喜こんで「やれ〳〵くたびれたうゝん」とのびをしますと可笑しいぢやありませんか茶釜に手足や首や尻尾がによろ〳〵と生えて「どれ本堂へでも出かけようか」茶釜がこらこらつと踊り乍ら本堂へ來たのをお勤めして居た小僧さん達が見つけて吃驚しました「やあ茶釜のお化だ。早く捕へろ」あつちへ行つた危い〳〵」やつとの事で小僧さん達はそのお化の茶釜を生捕りました。和尚さんも出て來て「やれ悉はやの〳〵もうもうこんな恐ろしい茶釜をお寺へ置いとく事は出來ません」丁度そこへお寺へ出入りのくづ屋さんがやつてきたのでそのお化の茶釜を賣つてしまつて「さあもう恐い茶釜はお寺にはゐないからお前達もお勤めにおかゝり又後程にはご馳走でもいたしませうから」有難う存じます」丁度その夜中の事です、くづ屋さんは晝間のつかれで、ぐう〳〵と居眠りをしてゐますと、誰だか枕元で「くづ屋さん〳〵」と呼び起すではありませんか、「誰だらう」と思つてくづ屋さんは眠い目をこすり乍ら起

サア〳〵〳〵目出たふなつてきたわいエ、誰ぞマア謠うたひがこいでなと見やる外面へ四つ子の墨の衣に草鞋がけ安養寺尼寺常念はつち、ソリヤコソ來たはと阿呆な駈け出で、抱て這入るを顏見て吃驚、ヤ、お末ぢやないかわりや一人戻つたか、そうしてマア變つたなりしてゐるな、アイ爺さんにこんな美くしいべゝしてもらふた、が餘りこのべゝは白いによつて何にやらたんと書いて下さつた、この書いたのを父樣や伯母樣に一寸見せて來いと云ふて祖父樣が門口迄連れて來て下さつたわいのう、ヤアと二人が立ち寄つてあたふた脫がす墨染の、下には何か白無垢におさんが筆のちらし書、何んぢや、涙乍ら一筆しめし上げまいらせ候、アツフーム、エ先き程とゝ樣連立ち歸られ候節小春樣御忍ばせの姿たしかに見受け候へ共、御存じの譯合故、御目もじもなり難く、書殘し申し上げまいらせ候アゝこれいのう治兵衛樣妾にも讀して下さんせ〳〵いなあ、

（十四）

エ、とかく連合の命が助けたさ、小春樣へわりなき御願ひ申上げ候ひしにお聞き屆けたまはる嬉しさ海山にもかえまほしく何ぼう忝けなふ存じ參らせ候エ、この御恩を送り候には末々お二人を御夫婦、エツ〳〵この御恩を送り候には末々お二人を御夫婦となし參らせ候より外なく存じ候、其上父樣の眞實を聞き我事は是迄の緣と諦め參らせ候又お末事はこなた乳にて育申すべく候勘太郎が事を小春樣へくれ〳〵も賴み上げ參らせ候、エ、何の事ぢやぞいなおさんさん、わたしやお前からお禮うき上つて見ると枕元に今日晝間お寺から買つて來た珍らしい茶釜に手や足や尻尾がによろ〳〵と生えてゐるではありませんか、くづ屋さんはきもをつぶして吃驚しました「うあゝお化だおたゝゝ助け」「くづ屋さん〳〵、そんなに吃驚なさらず私の云ふことを聞いて下さい實は私は文福と云ふ狸なんです。お寺にゐると何時も熱い目に許り會はされてゐたのを今日あなたに助けて載きましたそのお禮にお金もうけをさして上げようと思つてゐるのです」「そうかいそれは有難い、だけどお金もうけつて一體どうするのだい」「それはれくづ屋さん私はこの姿で手に傘を持つて踊るのです」「やあそれは珍らしい文福狸の綱渡りかいでは直にその用意〳〵だ」その翌日くづ屋さんは急ごしらえで見世物小屋を作りました「さあ評判ぢや〳〵文福茶釜狸の綱渡りでござい。いらつしやい〳〵」何しろ珍らしいものですから見世物小屋の中は直に人で一杯になつてしまひました。やがて時間が來まするとくづ屋さんは手に拍子木を持つて打ち囃しました。やがて幕が開いてくづ屋さんは上下をつけて、文福狸は手に傘を持つてちよこ〳〵と出て來て皆見物衆に挨拶をしましたやがてくづ屋さんは大聲を張りあげて「えゝ皆さまこゝ元文福狸お目通りいたします」「ればこの文福茶釜太夫の綱渡りとござい」お醫でくづ屋さんはお金もうけをいたしました。けれどこのくづ屋さんは正直ものでしたからもうけたお金をすつかり自分のふところへ入れないで半分とそしてその珍らしい茶釜をお寺へ持つて納めた行かうと思ひました丁度くづ屋さんがお寺の入口へ來た時分何も知らないで丁度本堂ではお勤めが始まつてゐました。

ける覺はないはいな、こりやまあ妾をばずつながらす氣かいな〳〵……、これいな申し治兵衛樣、おさんさんを呼び戻して下さんせ〳〵と立て見居て見うろ〳〵と譯も涙にくれ居たる、治兵衛は袂引き寄せて、ナニ〳〵、舅五左衛門申入候、エイアノ舅親仁の恩しらず奴、うぬが何のろくな事書上る物じやい、アゝこれいな治兵衛樣その樣に腹を立てずにまあ讀で見やしやんせいなエ、イアノ舅の恩知らずあの餓鬼は何のろくな事書いてたまるものかい、サ、その樣に云はずとマ讀でみれば判るぢやないかいな、讀で見やしやんせと云ふに、エ、とつともう、あためんごい、エ、舅五左衛門申入候六年以前にあたはぬ銀山にかゝり御損失をかけ候處聟舅の由緣を以て證文殘らず返し下され千萬忝けなく存じ奉り候、知れた事ぢやわい、エ、金子の減少本家への聞こえを思し召しそれ故の遊所通ひ、始の嘘が誠となるは我人若年の時を思ひ出し申、エツ、始の嘘が誠となるは我人若年の時を思ひ出し申候、若年、若年、アツはあ成程、エ先頃娘に右の入譯委細に承知仕候故輕少乍ら金子百五十兩先刻衣裝相改め候節、たんすの大抽斗へ差入置申、アノ小春々々一寸簞笥の大抽斗明けてみや、いやいの其の下の方ぢやわいの、アツほんに此處にござんすわいなア、エツアゝあるかえ、

（十五）

右金子を以て小春殿を請け出し、コレ〳〵小春〳〵一寸〳〵、是を見や〳〵、それ右金子を以て小春殿を請出し、長く御添ひ下さるべく候、娘さん事はお末諸共今日尼に致し、エツ娘さん事はお末諸共今日尼に致し、尼に尼コレ小春、おさんが尼になつたといやい、エツおさん樣が尼にならしやんしたら妾は云ひ譯がない、ごうせう〳〵……ぢやて、おさんが尼になつたといやい、娘さん事はお末諸共今日尼に致し貞主智月と法名つけ天下茶屋尼寺安養寺へ連れ行き先刻下されし五十兩は二人の者の飯料、則寺へ詞堂に上げ申候、皆まで讀まず兩人は、ワツと斗りに聲を上げ……そりや胴慾なおさん樣、ア……これまで悋氣もなされずに逢はして給はる御高恩、聞き入れたのが、かせになり、こんな事なら其の時に何故さう云ふては下さんせぬ、これなア申し治兵衛さん、おさん樣を呼び戻し千年も萬年も添ひ遂げて下さんせ……この子は可愛うエーマないかいな……見れば見る程いたいけな愛に放るゝ稚子の、乳房にはなるゝいぢらしさ孤兒となつたるは、皆妾から起つた事堪忍してと斗りにて、取亂したるわび涙、ことはりせめて哀れなる、

（十六）

折からうそ〳〵善六太兵衛門口ほそめに、コリヤ見附けた、ヤイ治兵衛奴、俺が請出して女房にする小春を、うぬは又何故引込んだい〳〵、アゝコレ〳〵太兵衛樣こまごと云ふにや及ばぬ是迄ぢう〳〵愈魂ある治兵衛奴、ぶち殺して腹いよと双方より、ぶちかゝるを、利腕つかんで、コリヤ〳〵三五郎小春に怪我させぬ樣、働け〳〵、オツト任しよと箒の助太刀、あなたこなたをちら〳〵と、見る目あやうさ氣をひやす、いらつて打こむ善六太兵衛へ、折よくはづせば二人は同志打ち、そりや治兵衛奴が切りおつたと、わめけば是非なく乘りかゝり日頃の意趣とと、めの刀、コリヤ〳〵三五郎〳〵お末を連れて奥へ行け〳〵、コレ〳〵小春々々怖い事はない〳〵〳〵怖い事はないのう、モ斯うなる上は是非に及ばぬ、最期所は網島の大長寺、人なき內に、サアおじやと手をとり急ぐ惡緣の、末は涙の漢鹽草噂の種と成りにけり。

浪花節 山城屋和助と藤田傳三郎

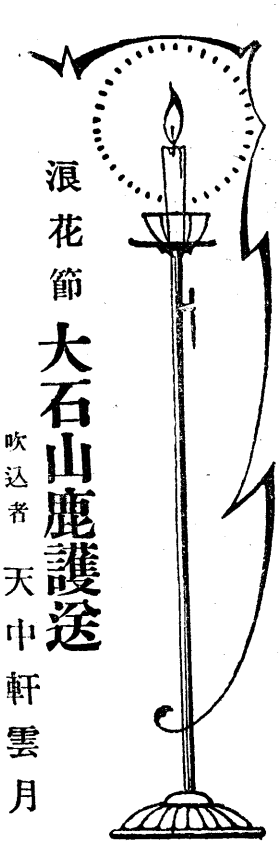
吹込者 京山若丸

横濱南中通り二丁目八間々口の大屋臺、陸軍省御用達山城屋和助とゞふ大看板、主人を始め小僧まで、ぢやんぎり頭の洋服姿、どうだい行つて見たか南中通りの山城屋の店の表へ行つて見よ珍らしいよ、エッ、どうだい洋服を着たぢやんぎり坊主の勢揃ひがしてあるぢやねえか、お前方つまらぬ事を云ふぢやない、何にも判るまいがあの人は元、長州様の御家來で、奇兵隊の隊長、大變手柄をなさつた人ぢや、江戸で德川様がお亡びて新帝様が江戸へお引越しになつた後は世が大平に治まつたもう治まれば我々に用事は無い、此の上は日本と云ふ國を肥やすのが第一、其の肥やすと云ふのは日本人同志が鬢の毛のむしり合ひぢや駄目ぢや、どうしても西洋の金を取るのが肝腎ださうな、それであの人が貿易商を始めた、伊藤俊助が博文大隈初太郎が重信と云ふいづれも偉い名前になるのに、あの人は野村三藏を捨て俄に山城屋和助となつた偉い人、横濱市中は大の評判或日の事表へ來たる一人の書生、破ぶれ着物に古袴、顏色青ざめ瘠衰え、ションボリとして山城屋の表に立つ、今日わ、私は長州の國の藤田傳三郎と云ふ者でムいますが、當家の旦那様はお宅でムいませうか、お尋れの山城屋和助は私でありますが何にか用事かれ、ナニ手紙を持つて來た、どれ、受取て見れば表書に野村三藏殿屆、裏てには神部隼人とある、見るなり手紙をテーブルの上手に直して山城屋容を正して珍らしや我先生、絶て久しく音信も仕らぬ不都合者お叱りもなく先生よりの此の御手跡近頃持つて山城屋恐縮に存じます。と、自分が文字を教はつた、其の先生が今目の前に居られる如く行を、始終見て居た傳三郎、一膝先きに乘り出し、ア、此の人ぢや〳〵俺の主人は此人ぢや、お使ひ下さい貴方の部下に貴方の爲なら傳三郎差し上げまする命まで、讀だ手紙を押し頂て懷中に、其頃先生と生徒の間柄はこの位睦かつたものだ、處が今は世の中が開けましてさう云ふ譯に參りません、所々に生徒が集つて先生を追ひ出す相談が出來る、山城屋和助は先生の手紙を頂て懷中にしまつた、藤田、神部先生が貴方を商人にして呉れとの依頼狀ぢや、先生の向けられる人愚な人はあるまい、共にやらう、處が商人は難かしいぞ然しお前に尋れるが、どうぢやお前は酒が好きか、呑むか偉い、博奕はどうぢや、同じくやるか、ウムじて散財はやはり好きか、偉い、人を見る人は目のつけ處が違ふ、そこらを偉いと褒めたのぢや今日先生の手紙の文面に曰く、和助若者を一人差向ける田舍者で間にあふまいが門はきにでもしてやれ若し使はればお前が宅の玄關で首つる奴ぢやと書てある、命がけで奉公に來て當の相手の主人から、お前道樂があるかと尋れらるれば、イヤありませんと、かくすが常、それにかくさず今迄犯した罪惡を殘らずこれに懺悔して事改て仕えんとは物に表裏の無い奴ぢや、されば來たれよ傳三郎、遊びに行かうと出て來たる早處京の今日は吉原明日は新橋品川や、意氣な所で金春町、檀那店やら葭町やら散財して女郎買ひする事丁度四十一日間如何な藤田もまいつてしまい、顏肉おちて頰骨出て、且那もう遊びは厭になりました、最早命が無くなりますと、云ふや和助は容を正し然し藤田よ、厭になつたと云ふならば無理に遊ぶと云はないが其方も六尺五寸の褌しめた男ぢやぞ、一度男子が厭になつたと云ふ遊びよもや再びやりやすまい、再びやつたら承知はせぬぞ。

浪花節 南部坂

吹込者 桃中軒如雲

引て來ました後室の居間、御後室にも御目醒めの、夜はほの〳〵と明け渡る、周章駈け込む一人の女、申上ます、何事なるか、只今門前に足輕寺坂吉右衛門と申す者罷越、昨夜本所松坂町吉良の邸に大石様始めとして四十何人乘り込んで見事御主の仇討した、注進として罷り出でゝ候と、聞て吃驚陽泉院、戸田の局と顏見合せ、夢ではないか扨ては昨日良雄が來たわありや餘所ながらの暇乞にてあつたるか知らぬ女の淺薄より定めて腹がたつたであらう、足輕たりとも苦しうない、目通り許すのお詞あり、稍ありまして案内につれ、中庭に通る寺坂は然も昨夜の仇討姿の儘、雪にぺつりたおく面形此時寺坂頭をあげて形を改め、たかゞ下郎奴の分才にて、御後室様御目通り相叶ひしは、下郎奴の面目これに過ぎたるはなし、いで仕らん昨夜の仇討物語、赤穗最後の評定の折、同志は五十三名あつたれど、老て死んだる者もあり、行方不明の者もあり、昨日高輪泉岳寺に最後の評定、昨夜本所尾上町楠屋の二階に勢揃ひ、集る同志は四十七人、欠しは横川勘平のみ、刻限來たるを待ち受けて同じ扮裝の勇しく、打つや太鼓の山鹿流、火事よ〳〵と呼ばわりつ吉良殿邸の御門前、兼ての指圖は東組西組となぞらへたり、東組とは表門總大將が內藏之助、西組とは裏御門、大將主稅良金に、後見吉田忠左衛門、續て小野寺十內と、言はれた時に戸田局、兄も共かと嬉し泣、武者奉行片岡源吾右衛門、御長屋係が千葉三郎兵衛、御門の屋根に繩梯子やれ孰あらん一番乘りと言ふ處に後れ走せなる横川勘平後れました、申譯、勘平宗則一番乘りと、繩の梯子に手足が掛る、後に續くが此場に及んで逃るは卑怯、手向ひ御免と言ひ乍ら、鞘を拂つた涙の平、首かき落し木村岡右衛門、船廻しにて泉岳寺に送る、下郎奴はとりあえず此段注進仕り候と息もつかずの物語。竹林、身を躍らして門の內、閂折つて八文字、開くを合圖にドッ一度に乘り込む同志の面々、大高源吾忠雄は、玄關前に立上り、天にも轟く大音聲、ヤレ我々は播州赤穗の浪士、いでや吉郎殿御出合候へ〳〵と、自慢のカケヤ振上げて、玄關正面黑塗椽は杉の柾目の扉を、力まかせに打壞す、夢破ぶられて吉良殿家來、逃るは迫ふなな向ふは切れよ、女子供の怪我させなな、山と川との合言葉、同志は殘らず血眼の、殘る隈なく尋ぬれどかいくれわからぬ吉良殿ありか、やがて裏手に合圖の呼子、雀踊なして集る同志、御隣家塙の雜倉內隱れ忍んだ吉良上野、一番鎗の間重次郎、倉の網戸を打破り、兩手を取つて引出せしが竹林、廣間只中迄連れ來たり、吉良は正面我々は後を取卷、內藏之助はるかに下り兩の手を突き、我々は播州赤穗の浪士大石內藏之助以下四十七名今宵當家に推參せしは、亡き殿殘念相續仕り度き心底、浪人共の心中お察しの上、御生害下さらば、年憚內藏之助御介錯仕り度しと、言はれた時に同士の面々、顏と面を見合せて、大石の武士の武士たる所以はこゝかと感ぜぬ者こそ一人もない、吉良ではあらぬ大友と、言へども聞かぬ面體見知り人里橘利兵衛をそれに引く、卑怯未練な吉良上野、隙を窺ひバタ〳〵〳〵、



浪花節

大石山鹿護送

吹込者　天中軒雲月

小田原離れて八丁曬、一枚二枚三枚橋、湯元大師を右に見て、初花かゝつた忍びの瀧、下にあるのが燒餅茶屋、和田の宿から甘酒茶屋、賽の河原の權現坂とかゝつて來れば、右左の物蔭から現れ出でしは山鹿の門弟三百餘名、ワアと一同鬨の聲、馬上にあつて内藏之助、それをツと指圖を致す、山鹿の乘物賽の河原地藏の前にピタリと下し、近藤源四郎逃げんとしたが馬驚いく竿立ち、なんでたまらう、ズンデンド腰が拔けたで立つ事出來ぬ、馬よりヒラリと飛び下りた内藏之助、瀨尾の持つたる鎗をとり石突つけば鞘走る、駕籠の戸開き山鹿の胸先きにしごいた鎗をピッタとつけ、各々方はなんでムる、されば吾々は山鹿甚五衞左門の門弟にて候、罪無き師匠を淺野家へ預け未だ其の上に播州赤穗へ護送致すとは、實に其意を得ざる次第、師匠を渡し下さらばそれでよし、若し渡さぬ時に於ては吾々一同の考もムる、おだまり召れ、若年乍ら内藏之助山鹿を赤穗へ護送致せの命は請けたれども、送中に於て門弟出で、これを渡せの命は未だに請け申さん、左程欲しくば只一突死骸に致して渡さうか、いや又各々方は山鹿先生の門弟とは受取りにくい何故なれば罪無い師匠と言ふたぢやないか、罪無い師匠を何處へ連れて逃げる氣ぢや、西は九州鎭西のあの知らぬ火の道しるべ、南は南海熊野路や北は越後か佐渡ヶ島、東は銚子あらをひか津輕南部や蝦夷松前の果迄も皆な德川將軍の御支配地にあらざるはなし何處へ連れて逃げるとも山は人馬の絶ゆるまで海は艪櫂の續くだけ、石を起して草の根分けて探し出された其時は罪ない師匠に罪がつく、曇り無き身は何時かは晴るゝ各々方よ其處に心がつかざるか何故に時節を待たぬのぢや、左程欲くば唯一突死骸に致して渡さうかさればさ、一同ハツト驚いた顏見合して、欺すに手なし、大石の前に來たつて、内藏之助殿我々共の了見違ひでムつた、何卒御堪辨下しおかる樣、然し遠く離れた播州へ參る師匠の身の上、武士の情け乘物より出して別れの詞交はさして下されやうなら是に過ぎたる喜びはムらん、山鹿先生乘物より出でられて御門弟衆に別れの詞、イヤそりやなるまい内藏之助殿、山鹿護送の其の途中箱根に於て門弟出で、駕籠から出して別れの詞交はさせたと言ふ事が、お上に聞こへなば如何なるお咎あるやもしれぬ、アイヤ必ず共に御心配御無用、萬事は内藏之助の胸中にムる、お年若には珍らしい、花も實もある良雄殿お詞添けないと甚五左衞門、乘物より出でんとする時に良雄左の手を延し山鹿の右の袂チョと押へ己れの右の手懷中なせしは用意の懷劍山鹿が逃げんとしたなれば箱を拂て只一突と考て居たと言ふがそれは嘘ぢや、それは空事ぢやそんな小さな膽魂なれば後年天下に名は殘らぬぞ、瀨尾、行きは急いで箱根の山の風景も見なんだ、景色變つて面白し、床机をもて、持て來る床机に腰をかけ山鹿の方は見向きもやらぬ、こちらは甚五左衞門乘物より出るを待ち兼た門弟一同、バラ〳〵〳〵駈けよつていでや御師匠お供な致さん、だまらつせ、甚五左衞門さう言ふ敎えはしてない積り、今内藏之助殿が言はれた詞が判らぬかそれ程自分が大切なら、西も東も知らぬ地へ、參る山鹿の身の上を何分頼む内藏殿と何故に頼んで吳れぬのぢや此處は箱根の往來繁く、各々方の内には身分あるべき人もありと覺ゆ、少しも早く下山召れ、ハ、、、成程と心付いたか一同内藏之助に向ひその無禮の段々を詫び何卒師匠の身の上を、萬事良雄引請けて候、此の一言に有難がつて一同が、矢猛心の張弓の蔓もゆるんでがつかりと、しほれて下る箱根山、後見送りて山鹿先生、弟子はこれ程迄に師匠を慕ふて吳れるか、と早老の身の涙が先き、此處で泣いたら十六になる子供に笑はるゝ、内藏殿御免と駕籠の中ピッタリ閉めて駕籠の戸の聲はたてれど忍び泣。

浪花節

天一坊

吹込者　浪花亭綾太郎

是は德川天一坊、記憶致せし御粗末を讀み奉る、清き流れの德川を一日も惡人輩に汚されるが殘念ぢや、吉田白石仲間となつて供してくりやれと、亡者姿の忠相侯、此處は數寄屋橋御門内、我が邸を漸々と、拔けて出ました小石川、水戸の館となりぬれば、山野部主税の案内で、奥殿さして進みました、御病氣中の綱枝の君御氣に入りの越前が、來たと聞かれて床の上、はるかに下り手を突いて、涙と共に控えける、然らば其方天一坊の再調致し度いと申か、ヨイ綱枝一命に代えて上樣に願ひ、天一坊の再吟味許し得さすぞ、聞くに喜ぶ忠相は、御恩は忘れは仕らず、たゞ身をふるはせ嬉し泣き其方邸を出る時何と申して拔けて參つた白石治右衞門の母の死骸となつて拔けて出ましてムいます、左樣か、白石の母の死骸となつて拔けたなら、寺迄行つてはみたが冥土が景氣が惡いから戻つて來たともよも言えまい、ヨイ〳〵主税々々、ハ、其方是より越前を數寄屋橋邸迄送りつかわせ、心得ましてムります、待て、ハ、水戸家の威嚴を損れぬ樣に送れよ、是れがなか〳〵主税に對して大問題です、未だ今年十八の山野部主税、心得て候と是を請合、邸へ歸

哥澤枯野ゆかしき

吹込者　唄芝爲枝　糸芝爲代

枯野ゆかしき隅田ゴゝみ、心ゆかしゆる夜半の月、田面にうつる人影は、パッとたつてはアレかりがれの夫婦づれ。

富士や淺間

富士や淺間の煙はおろか、衞士の焚く火は澤邊の螢、やくやもしほで身をこがす、そうじやいな、あひ緣奇緣はあじなもの、片時忘るゝ暇もなくいつせつ、體もやる氣になつたわいな、おかたぢけ。

ると十人の供を連れて越前守白石治右衞門吉田三五郎、山田仙助、池田大助、是を加えて十五名、小石川のお館を出て、急ぎ來たるは數寄屋橋、難なく固めの役人欺して這入る門内、喜び勇む山野部主税、越前の守を送り屆けて戻つて來ました白山御殿下話が分れてこちらは水戸綱枝公、夜中も厭はず起きあがられてお湯浴び櫛けづりも早おはり、上樣御目通りを願ふ、早速お許になり越前へ再吟味を許される、お客樣方大歎きの山野内と越前の足代問答の一席は是にとゞめて又明晩。

新地唄

茶音頭

吹込者　唄　吉川あい豆　糸　せつ幸　琴　尺八　上田芳憧　奴

世の中に勝れて花は吉野山、もみぢは龍田茶は宇治の、都の辰巳それよりも、廓は都の末申、好きとは誰が名に立てゝ濃茶の色の深みどり、松の位に競べては、園と云ふもきくけれど、情けは同じ飾床、かざらぬ駒の裏表、袱紗さばけぬ心から。

逢ふて何うして香箱の、柄杓の竹は直ぐなれどそちは茶杓のゆがみ文字、

憂さを晴らしの初むかし昔話の爺婆と、なるまで釜の中さめず縁はくさりの末長く、千代萬代え。

観世流謠曲

杜若

吹込者　笛　生一左兵衛　小　貞光義次　高木敏郎　大　青木信太郎　森　利夫

匂ひうつる菖蒲の髪の、色はいづれ似たりや似たり、杜若花菖蒲梢に鳴くは蟬の唐衣の、袖白妙の卯の花の雪の夜も白々と明くる東雲の淺紫の杜若の花も悟りの心開けて、すはや今こそ草木國土、すはや今こそ草木國土、悉皆成佛の御法を得てこそ、失せにけれ。

玉葛

げに妄執の雲霧の、げに妄執の雲

小唄集

江戸小唄

きりの雨

吹込者　美之助

霧の雨かゝりて袖にぬれ燕、アレ見やしやんせ鳥でさえ、馴れし所を振り捨て、知らぬ他國で苦勞して、やゝを、もうけてはるゞゝと故郷へ歸る旅の空、しほらしいではないかいな。

青柳

青柳の、たゝかば破れん薄氷、春の風にも解けやすく、浮名も立ちし主さんに、結んでもらふ縁の糸ぬってやりたいはなのロ

小唄

宇治柴

吹込者　一非　かつ

▼宇治の柴舟は早瀬を渡る、わたしや川舟で浮かれ行く、ヨイヤサ〳〵

▼花は色々五色に咲けど、主にみかえる花はない、ヨイヤサ〳〵

▼目出度〳〵の若松樣よ、枝も榮える葉も茂る、ヨイヤサ〳〵

むらさき

紫のゆかりの色やかきつばた、染めてなまなかくよ〳〵とあけくれ思ふて暮すエー。

小唄

文句入磯節

吹込者　さん八

▼稽古相撲なら負けてもやろが、今日は初日で負けられぬ、今日はれ、エー西、鳳には東大錦ぢやんぞい、エ、見合はして〳〵〳〵ハッケヨイヤ〳〵〳〵立つたられからんでヨイショコドスコイと投げたさうな。

▼田舍育の藪鶯が、始めて東へ下る道、一夜の宿をば取はづし、西へ行けども宿はなし、東へ行けども宿はなし、梅の小枝を宿として落つる木の葉を夜着となし、月星眺めてはサ、ホーホケキョと鳴くばかり。

博多節

梅に、鶯竹には雀牡丹に唐獅子菜の葉に蝶々、妾しや貴方を松に、アラドッコイショ、鶴、世の中陽氣で暮しやんせ、アおいでましたかれ。

小唄

二上り新内

よし町　兼松

▼エ！淺草田茶屋の茶店の小萬、花か紅葉か若し花ならば、里の土産に一枝欲しや、エンヤラネ、サノヨイサエンヤラサ、エンヤラヤレコラサ、サノセ、アレハサエンヤラセ。

小唄

びんほつ替唄

吹込者　力松

▼今朝の寒さに歸えしてなろか、雪折笹や村雀なんぼ泣いたとてさ、握ったエー手と手と肌と肌

▼主の落目を見捨てなろか、もとは妾故此苦勞、なんぼ泣いたとてさ、切れはエーせぬぞえ命が

▼せなか合せて、寢てよいものか、まゝに逢はれる身ではなし、なんぼ泣いたとてさ仲をエー直さなおかりよか。

▼今朝の寒さに殺してなろか、たつた一枚の安羽織、なんぼ泣いたとてさ、たえたエー目と目と腹と腹サ。

▼思ひこがれる山川百里、遠いお前を忘られず、なんぼ泣いたとてさ、聞こゑやエーせぬぞえ、泣いてゐる。

舘山節

▼遠くはなれて三筋のつとめ、實は座敷で、まぎれてゐれど、更けて鐘の音、聞けば貴郎の事ばかり、早く苦界をやめにする。

▼度胸定めて惚れたる主に、いらぬお世話ぢや水さす人に、見せてやり度い逢ふた其の夜の二人が仲を、晴れて添ふのを見て頂戴。

闘の五本松

法界

三十三間堂

富士山組

アー三十三間堂の、棟木の由來和歌の浦には名所がムる一に權現二に玉津島、三に下り松四に鹽釜よ　ヨウイ〳〵、ヨイトナ、木遣音頭の勇ましや、曳いて登るやみやこ山、ショコ〳〵一力屋のほんまホイ。

稽古用

長唄

汐汲

吹込者　糸　杵屋登美　杵屋六喜正

ゆかしきつても白浪のよする渚に

り、是にも月の入りたるや、月は一つ、影は二たつ三つ、見られつも雲の上此所は鳴尾の松影に月を荷なふて、見渡せば、而白や、なれても須磨の夕まぐれ漁る舟のよ

りて、磯馴松のなつかしや、遺物こそ今は仇なれ見初めてそめて、逢ふた其時やつい轉び寢の襦もとかいでそれなりに、二人が裾へ狩衣を出けてぞ頼む睦言に、可

癒をおさえた手を握り、ぢつと見つめて涙ぐみ、やさし貴郎の親切が、憎くや私の、命とり。

都々逸

▼聾者と聾者が、向ふとこつち、オーイ、此の川ヒヤ淺いでムいますかよ、深いでムいますかよアヽ何にか云つてるな、俺聾者で判んないだよ、ハアハヽ判んないかよ、コレ俺も聾者で判んれえだよ、ハア耳まで、あつては越されない、

▼まゝよ三度笠、横ぢちょも古いから、眞すぐにかぶり、「馬子の衆の癖か高聲で、お前さんとならよ、何處までもよ、ウン畜性、旅は道連れ世は情け。

木遣り

▼エ！淺草田茶屋の茶店の小萬、花か紅葉か若し花ならば、里の土産に一枝欲しや、エンヤラネ、サノヨイサエンヤラサ、エンヤラヤレコラサ、サノセ、アレハサエンヤラセ。

霧の、迷ひもよしや憂かりけろ、人を初瀬の山風、烈しく落て露も涙も散々に秋の柴の身も朽ち果てれ恨めしや、恨は人をも世をも、恨みは人をも世をも、思ひ思はじ唯身一つの、報の罪や、數々の憂き名に立ちしも懺悔の有樣、或ば湧き返り、岩漏る水の、思ひに咽び、或は焦るゝや、身より出づる玉の見るまで包めども、螢に亂れつる、影もよしなや恥かしやと、此の妄執を、翻す、心は眞如の玉葛、心は眞如の玉葛、長き夢路は覺めにけり。

淨瑠璃

新口村

吹込者　竹本鏡太夫
糸　豐澤新左衛門

落人の、爲かや今は冬がれて、すゝき尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先き、人目を包む頬かぶり、隱せど色香梅川が馴れぬ旅路を忠兵衛が、いたわる身さへ雪風に、凍れる手先懷中にあたゝめられつ溫めつ、石原道を足曳の大和はこゝぞ故郷の、新口村に着きけるが、お心付た此お金、遂樣ながら戴きます、大阪を立退ても私が姿目にたてば、かりゞに日をおくり、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し廿日あまりに四十兩、つかひ果して二歩殘る、金故大事の忠兵衛樣科人にしたも私から、嘸憎くからふお腹も立ふが因果づくと諦めてお赦しなされて下さりませ、親子は一世の緣とやら此世のわかれにたつた一目逢ふて進ぜて下さんせと奥の障子を明るを引き留。

世をおくる、如何に此身が海士じやと云ふて、辛氣しんきに袖濡れて、いつか嬉しき逢瀬もと君には誰かつげの櫛、さしくる潮を汲うよ、汲み別けて、見れば月こそ桶にあやつしつし、波をけたてゝ友呼びかはす、濱千鳥の散りやちり〳〵、ちりやちり〳〵ちり〳〵ばつと塩屋の煙さえ、立つ名いとはで三年はこゝに須磨の浦はの松の行平立ち歸りこば、我も小蔭にいざ立ち

レコード文句集

三絃童謠　竹藪

唄　森きみ子
三味　杵屋佐吉

竹

風の吹く日の竹藪は
みんな揃つて手をあげて
體をれぢて體をそらし
カサ〳〵〳〵　大笑ひ。

雪の降る日の竹藪は
みんなそろつて手をたれて
頭を下げて腰まげて
サラ〳〵〳〵〳〵　内密話。

觀音樣のおびんづる

觀音樣のおびんづるは鼻を撫でられる、
撫でられ〳〵鼻びくおびんづるになつちやつた、
觀音樣のおびんづるは顯を撫でられる、
撫でられ〳〵顯なしおびんづるになつちやつた、
觀音樣のおびんづるは顯なし鼻びくおびんづる。

童謠　お祭

吹込者　野澤照子

▼お祭くるかよ嬉しいな
畑はかぼちやの花ざかり
お山も浮かれてきつね雨
赤い夕日が照りかゝる

▼お山は月夜だうれしいな
あしたの祭は大あたり
笛もふかうよ踊らうよ
夢にやたぬきの腹づゝみ。

達磨店の地震

地震だ　地震だ　達磨店の地震だ
ずらり並んで、柵で寢てゐた、
大達磨小達磨
一緒に目が醒め　彼方向き　此方向き
背中合はせに　鉢合はせ
自分勝手にゆたてゐる　ゆれてゐる
ころりころんで　柵を飛び下り
お部屋の隅つこで鉢卷姿
背中を此方向け　壁をにらんで
小達磨が
一人ぽつちで　ゆれでゐる　ゆれてゐる
地震だ　地震だ　達磨店に地震だ

お盆

母さん　母さん　佛さま
遠くの遠くに行つてまず
愛がらすのエ、何じやゝら、泣て別れよか笑ふて待とか待たばこんどの約束を、忘るゝ暇は、ないわいな、それから深う云ひはしまの、水も漏さぬ仲々は、濡による身は傘さして御ざんせ、

あやめが咲いてもゝどらない
それでもお盆にやもどります、
もどります、
七日は七夕星まつり
空にはすゝしい天の川
母さんお舟で歸るかしら
それともお輿で往きのよに
往きのよに
母さん　母さん　佛さま
ほたるも出てます待つてます
むかへ火たきましよ姉さまと
待ちどの母さん佛さま、佛さま

童謠　青い鳥

吹込者　ミチル學園
小橋みち代

1、なきのなみだの青い鳥
お前の生れはどこのくに
カランダスペインイタリヤか
みなみの南のあついくに
2、なきのなみだの青い鳥
いつ迄さうしてないてるの
ミチルチルチル來ましたら
母さんとこへ行けませう

母さん里

母さん里は一本榎
親ばと子ばとならんでみてた
のつぽのつぽえのき
天までとゞけ
母さん里へもちしよつていつた

泊り舟

雨のふるのにどこへいた
ゆふべのふねはどこへいた
けさはさみしいあればかり
ゆふべのふねはどこへいた
雨のふるのにどこへいた

たりがさと云はれたら風ひも開く花傘、しほらしや、いさま申して歸る波の音の、須磨の浦かけて村雨と聞しも今朝見れば、松風ばかりや、殘るらん、松風の松風の鳴は世々に殘るらむ。

夏の鶯

うぐひすうぐひすかごの鳥
ないてないてなきとほして
日がな一日なきとほして
あかるい夏の日がくれる
うぐひすうぐひす谷わたり
さとのお山がこひしかろ
山にやまつかな百合がさき
かばの林に日がおちる
うぐひすうぐひすお姫さま
くろいきものをかぶせられ
とまり木につかまつて
ひとりぼつちでれむります
さてもさみしい鶯が
夜みる夢はなんであろ
籠のむかふに夕ぼしが
ちろりちろりまたたいた
またたいた

書生節　松の聲

吹込者　寺井金春

嗚呼世は夢や夢の夜や
今は三歳の其の昔。
時も彌生の中の頃
いとなつかしき父母や
十有餘年がその間
朝な夕なに眺めたる
春は花咲き夏茂り
秋は紅葉の錦衣
冬は雪降る故郷の
心も殘る山々や
月さへ宿る清水に
惜む別れのステーション

聽音記新聞

發行兼編輯人　聽音記子
印刷

問題のラヂオ吹込は遞信省令で禁止か

現在の著作權法を以て適確な判斷を下すには研究の餘地がある

ラヂオレコードの出現は期せずして斯界に一大問題を惹起し各關係筋では種々論究される處となつたが、抑々ラヂオレコードなるものは當初より營利を目的として製作されたものではなく、蓄音器會社が自己の利權並にその專屬藝術家を擁護せんが爲に目論んだ手段であつて、レコード其のものより得る直接の利益を企圖して行はれた手段ではない、要はラヂオに依り蓄音器會社專屬の藝術家が放送した場合、その放送演述歌唱を他に於てレコードに吹込まれる危惧があり、從つて是を處罰する明文が現在我が國の法文では解釋の如何に依つて不備と見做された結果、一日も早く夫れが明文としての實現を促すべく行はれたのであるから其の後當局に於ても此の問題に對する善後策に就いては種々研究論議されたものらしく、大阪放送局の如きは平岡理事が日東蓄の森下氏と種々協議の上主務省へ是が禁止方法に對して陳情する處があつた結果、此の程遞信省に於て省令を以て禁止する旨の案が認可されるに到つた。尤も是は遞信省としての處置であつて法律上の禁止方法ではないが、何れにしても蓄音器會社としてはラヂオより放送されるものがレコードへ吹込みする事が禁止されさへすれば宜いのであるから愈々遞信省令を以てラヂオ吹込が不可能となれば今後は安心して自己の專屬藝術家を放送せしめる事が出來る。又一方放送局に於ても蓄音器會社が專屬とせる一流藝術家を聘して內容の充實したプログラムに依り一般聽取者に對し十二分の滿足を與えしむる事が出來るのであるから今後は大いに期待すべきものが出來るであらう、何にしてもラヂオ出現以來蓄音器會社對放送局の間に胚胎してゐた問題に對して解決の曙光を見出し得た事は喜ばしい次第である。

終に此の問題が勃發すると共に、巷間ラヂオレコード商會の意圖に對して反對せんが爲の反對を提唱したり又是等の徒と立場を異にせる者が事の經緯をより一層問題視し吹聽し以て徒に野次的言辭を弄して、愼重の態度を失したるは誠に遺憾とすべきことなるも、幸に是等の徒が存在の價値を認むるに足らざるものなれば吾人は敢て追究するの必要がないが是等を除いて大半の士が聚つて眞摯なる態度を以て本問題の解決に專受けることになつてゐる、尙今後は毎月一番宛を發賣する由。

澤田柳吉氏の佛書耽讀生活

長い間本欄から疎遠になつてゐたピアニスト澤田柳吉氏の近況を久し振りに紹介してみるならば、却々其の後の推移こそ特筆すべきものが多い且ては酒豪を以て自他共に夫れを肯定した澤田氏も最近大いに悟る處があつて酒のサの字も口にせず只管佛敎書類の聚集に努めてゐたが、怎やら思ふ程の書類は大抵集めた事が出來たものとみえて近頃は、ひれもす夜もすがら机を前に座禪を組んで佛書の精讀をこゝろし一切の俗塵を避けて嚴肅な生活を送つてゐる、時に外出する事があつても側目もふらず目的地に足を運ぶほかは用を足せば直ちに住家へ歸ると云ふ有樣で實に以前の澤田氏とは思ふことの出來ない謹直振りである、が此の直通的外出の實現は氏に取つて隨分困難だつたさうで昔の澤田氏と心得てゐる不所存者は直ぐ氏を捕へて酒にしようとする其處で思ひ付いたのが身に餘る太いステッキを持つて事で、氏は是を共に追拂所存者の邀擊者を追拂ふ具に備えてゐる。

心配で癒られぬ野澤照子孃

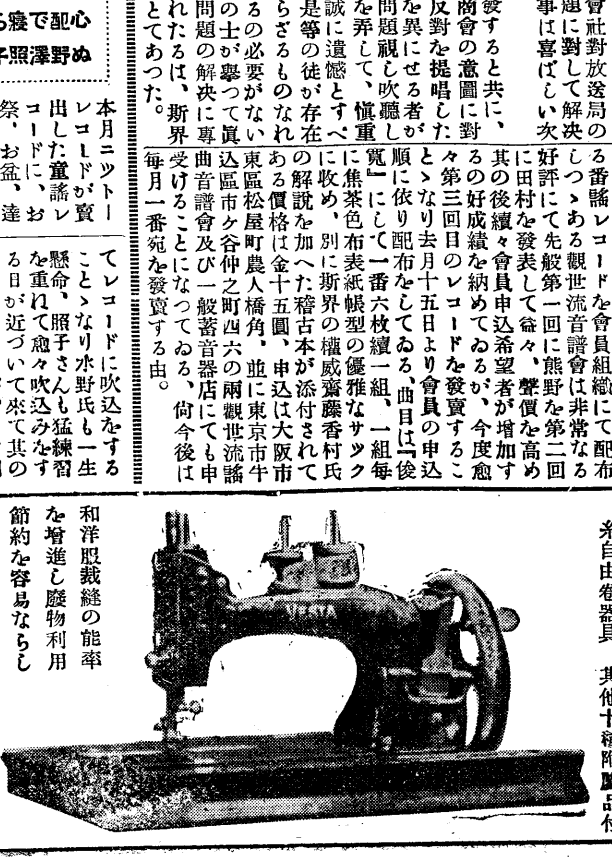
本月ニットトーレコードが賣出した童謠レコードに、お祭、お盆、達磨店の地震ゝ吹込んだ野澤照子さんは大阪洋樂研究所の研究生として水野康孝氏に師事し專ら聲樂の練習を積んでゐるが、性來の熱心家である上に聲量も豐富、曲に對する理解も明敏なので最近に到り著しい進境を示し、此の調子で行つたならば必ず將來期すべきものがあると囑望せられてゐる、

てレコードに吹込をすることゝなり水野氏も一生懸命、照子さんも猛練習を重ねて愈々吹込みをする日が近づいて來て其の前夜となつたが、サア明日の吹込が心配になりだして却々眠る事が出來ないと云つて時間は容赦なく過ぎ到頭吹込の日は來た、照子さんは吹込ラッパの前に立つて固唾を幾度か呑み込んだ、そして結果は案じた程でもなく馴れるに從つて十二分の咽喉を發揮するを得たので今度はすつかり嬉しくなつてしまひ、指導役の水野氏に「先生思つたよりスラ〳〵ゆきました」

觀世音譜會第三回の番謠音譜俊寛愈々發賣せらる

觀世流宗家觀世元滋氏の吹込になる番謠レコードを會員組織にて配布つゝある觀世流音譜會は非常なる好評にて先般第一回に熊野を第二回に田村を發表して益々、聲價を高めに其の後續々會員申込希望者が增加する其の好成績を納めてゐるが、今度愈々第三回目のレコードを發賣することゝなり去月十五日より會員の申込に依り配布をしてゐる、曲目は「俊寛」にして一番六枚續一組、一組毎に焦茶色布表紙帳型の優雅なサックに收め、別に斯界の權威齋藤香村氏の解說を加へた稽古本が添付されてある價格は金十五圓、申込は大阪市東區松屋町農人橋角、並に東京市牛込區市ケ谷仲之町四六の兩觀世流謠曲音譜會及び一般蓄音器店にても申

獨逸最新輸着品
家庭用ミシン
美麗なる蓋付、角刺定木、椽取器具
糸自由卷器具、其他十種附屬品付



和洋服裁縫の能率を增進し廢物利用節約を容易ならしむ完全なミシン、機械の堅牢と精巧なるは獨逸製の特色今や獨逸の總ての家庭に常備され又獨逸各女學校教授用として好評嘖々

特價　金四拾五圓

大阪市北區堂島中一丁目
婦女世界社代理部
電話北五五五八番

人間眞裸の姿を讃美する
龜井湘南氏の變屈振り
シロホンの名手であると共に東京相撲協會の役員として大いに國技を謳歌する

此の間日東蓄から賣出した龜井湘南氏のシロホン獨奏レコードは本邦レコード界には稀に見る器樂レコードとして發賣以來非常に好評を博してゐる。

同氏は元海軍々樂隊の樂手で、磊落そのもの、樣な性格の人で一見怎うして此の人がシロホンの名手かと疑はれる程、頗る音樂家らしくないタイプの人である、けれ共シロホン奏者の乏しい本邦樂壇に於て氏を措いて他に此種の名手を見出す事は到底不可能なことであつて、其の妙技は先年攝政宮殿下が御外遊の砌り、殿下の御旅情を御慰め申上げるべく御召艦に乘組んだ海軍々樂隊の一員として屢々御前演奏の光榮に浴し、其の鮮やかな演奏は恐おほくも殿下の御興をことのほか深からしめた、殊に殿下には御自身度々龜井氏の使用する把手を御取り上げになり樂器を鳴らされたさうで現在氏が愛藏し吹込みの際にも用ひたところのシロホンは同氏が除隊の時、御思召を以て特に御下賜されたもので、氏はシロホンの名手として斯界に誇る第一人者たるのみならず、限りなき榮譽の把握者である。夫れ丈に氏は常に謹嚴な態度を以て事に處して行くので往々舟癪玉を破裂さす事があるさうで、是に就て面白い挿話がある、何んでも或る最高學府に關係ある博士連の交友會が催された時是非氏に出演して貰ひ度いと依賴して來たので、出演を承諾し當日氏が行つてみると舞臺では今し大勢の藝妓連が囃子鳴物賑やかに何かを演じてゐる處であつた、さあ是を見た氏は納まらない、早速幹事をしてゐた人相漫畫談　あいまめ豆

▼ニツトーレコードが最近「新じうた」と銘打つて大いに儲けようとの魂膽から目下頻りに宣傳してゐる「新じうた」レコードの吹込者あい豆クンは、流石にレコード屋さんのお眼鏡に叶ふ丈あつて聲と云ひ藝と云ひ總てに申分がない、其處で賴まれもせぬ詮議だてだが、女でさへあれば誰にでも好意の押賣りをしたいのが漫談子の病で、彼女の將來に幸あれかしとの一念から、當り障りの無い程度で聊かお提灯を持つ次第、あい豆クンたるや是がために有難迷惑をしてもユメユメ怨むこと勿れ。

▼あい豆クンは本年とつて正に十八才但し是は自稱だから何共筆者保證の限りでない、斯く申す筆者ですらあの豊滿なそして成熟し切つた容姿を見るに十八才とは信じられないのであるから、或は人の嫌ふ丙午であるかもしれない又さうでないかも知れない、何れにしても最早や疑ふ餘地のない一人前の女性たる事は太鼓の樣な版を押してゞも保證する。

▼處で皆さん、彼女は年こそ肩上げを取るや取らずの乙女ではあるが恐しい程、各方面に亘つて完全な發達を遂げてゐる、夫れを方程式に現はすと（身長5尺4寸2分）十（體重16貫200匁）＝大邦西洲の女と云ふ樣な事になつて女としては實に見事な體格の所有者と云ふ事になる、がその性質は又是と反對に優し過ぎるほどしとやかで可憐で可愛らしく、常に滴る樣な愛嬌を惜氣もなく振りまく仕末で、お庇を以て彼女の嬌名は鼎の沸くが如き人氣を博してゐる、但し餘り誰彼の區別なく慈悲忍辱を垂れ給ふことは、彼女の爲めに却つて仇し結果を招來しはせぬかと他人の頭痛を痛氣に病む次第。

▼次に御紹介するのは彼女の趣味と嗜好である、一、義太夫（殊に三味線を彈く人に對して興味を持つ）二、芝居（是は餘り好きではないが或る理由に依つて必要）三、芝居へ行くと稱して夜の千日前を迂路つく事、怎うせ若い女の夜遊びだから是に附隨するものが如何なるものであるか位は云ふも野暮、賢明な皆樣の想像にお任せする、四、牛蒡、芋莖等々々々頗る多いが枚擧に遑がないから是位にして置くが、モウ一つ彼女が命に代えても貪り食ひたがるものがあるが、聊か他言を憚る底のものだから筆者は殘念ながら掲載を斷念する、但し是を暴食した爲に先年約十ケ月餘りの長きに亘つて腹痛に惱んだこと丈は皆樣の參考までに附記して置く必要があるだらう。

▼終りにあい豆クン吹込の新じうたレコードは當初新地唄と書いた爲新地の唄と誤解された向も少なくないが、是は新しい地唄と云ふ意味であるから日東蓄でも今後は殊更に地唄を「じうた」と假名で書く事にしたは眞裸になつて人間の姿を尊重し正義は其處に存在するのだと云ふのが持論である、それかあらぬか氏は相撲の讃美者で現在東京相撲協會の役員として明治神宮外苑に催される軍人相撲や學生相撲の時には會の牛耳を握つてゐる。

處で氏が過般日東蓄に吹込むに至つたに就いても面白い經緯がある、と云ふのは、日東蓄に吹込みをするまでに氏はガリエントレコードに初めてのレコード吹込みをしたのであるが、シロホンの高音部が皆目這入らない、是に就いて氏は「怎うか僕が演奏した丈の音は正直にレコードへ入れて貰ひ度い、音域の強り食ひは誠に困る」とあつて吹込直しを依賴したが夫れを聞かずに發賣して仕舞つたので、其の無謀に尠からず憤慨した氏は早速日東へ一貫方の處では私の叩き出す丈の音は細大漏さず吹込めるか、それなら是非オリエントの吹込直しを貴方の會社で遣り度い」と茲で龜井氏は日東蓄に吹込蓄のレコードに對して十二分の滿足をしてゐる、因に同社からは續いて同氏のシロホンレコードが發賣される事になつてゐるから今後はより一層期待すべきものがある。

第六回文部省推薦レコード認定
その曲目と吹込者

第六回文部省推薦認定レコードの審査の結果は去る八月中旬發表されたが、それに依ると日東蓄の推薦レコードは一七枚認定されたものが七枚計二四枚で、其の曲目並に吹込者は左の如し。

▼藝術的價値あるレコード
ヴアイオリン　ノルマ、ミヌエツト
吹込者……トーリヤポツパ
クラリネツト　カバチナ、エンセル
スセレナーデ
吹込者……進　五郎
マンドリン　タランテラ、パパナ。
吹込者……ラフアエルカラーチエ
喇曲　吹込者……奏上。
……觀世　元滋
義太夫　吹込者……太功記十段目
……竹本綾太夫
▼兒童的價値あるレコード
唱歌　日の丸、桃太郎、春が來た、
池の鯉。
吹込者……坂本　勝子
▼娯樂的價値あるレコード
ハーモニカ　ニューカレドニア、リベラの舟唄。
吹込者……佐藤　秀郎
サキソホン　オールドブラツクジヨ
吹込者……前野　港道
江戸小唄　夕ぐれ、待ちわびて、ひようたん。
吹込者……立花家美之助
筑前琵琶　常陸丸。
同　吹込者……豊田　旭鶴
浪花節　大石妻子別れ。
吹込者……桃中軒如雲
同　吹込者……孝子與吉。
……泯花亭綾太郎
同　吹込者……少年武士道。
……吉田虎右衛門
同　吹込者……朱村　友衛
鹽原多助。
同　吹込者……山内一豊の妻。
……京山　若丸
文部省認定レコード
パーマ教授英語會話上達法　七枚續
吹込者……ハロルドイパーマ

（投書歓迎嵩書に限る）

▼哥澤レコードが引續いて出ましたのをお禮申します來月新譜にも何卒お願申します成可く勝手な申し分ですが芝金さんか芝爲枝さんのを出して載き度う御座います唄もずつとくだけたむしろ滑稽ものを例へば「初秋や」「蓮の葉」「樂は苦の種」「あいたさ」の唄芝滿力さんの「さつまさ」が至極氣に入りました節廻しの豊な巧妙に唄つて下さいましたを感謝いたします今後共によいものをお願しますどし〳〵と（高津哥澤ファン）

▼筑前琵琶太田道灌は聲も琵琶も非常に大きくよくは入つて居ましたが少々聲の方に無理があつた樣ですが琵琶の音はあれで充分ですから聲の方を今少し御研究願ひます次回は五絃ものをお出し下さい秋根先生の壇の浦小栗栖廣德寺等をお願します（大阪　旭生）

▼おいおい燕君もつとどしどし獨唱のレコードを出さないか、やはり何と云つても俺等には日本語の方がわかりよくていゝや、廣瀬さんにヴアイオリンの助奏でグーノーのアベマリヤと歌劇ミニヨンを入れて貰ひたいものだ。その外何でもいゝどしどしと獨唱レコードを出して欲しい（福山愛聲生）

▼私が永い間望んで居た「時雨の炬燵」が出たことを喜こんで居ます而もこんな艶ものを駒太夫で聞く事は此の上もない結構、早く次回の分を出して下さいこの次は是非「新口村」を何卒駒太夫さんに依つて吹き込んで貰ひ度うございます（大阪福島　義太天生）

▼何事も平等である筈のニツトーレコードにセロのレコードが一枚もないのは殘念でなりません宮內省の雅樂部の方々にでも願つて是非ともお出し下さいそれに近頃水野康孝さんのが一寸も出ませんねダンスレコードもおもしろく聞かせて載きましたがもう少し大聲にい事です詩吟の出るのを鶴首してゐます（大阪　詩吟浪人）

▼私は最近日東レコードの吹込技術の進化には實に驚き入つたのでありますあの音聲の明瞭なると共に針音の無いのとは如何に技術の完備して居るかを明に表明して居る殊に如雲君の如き大なる聲量を其儘に吹込み得たるのはそれだ（福島縣　山本生）

▼我が日東黨よ何と云つても小唄ものは菊之助姐さんと力松姐さんに限るよ他社の小唄レコードでは到底あの樣な好い聲なんか聞かれない（此の上願はくば雨姐さんの竝んだ寫眞が見たい（秋田縣太曲町　醉月生）

▼中央音樂壇の粹を引き拔いてバイオリンの名曲を發表して下さい和樂に延壽、小三郎と大物を出すなら洋樂にもカラーチエの樣な第一人者をもつと出して下さい（山口縣大津郡　粟屋武夫）

▼江戸小唄に對時して表はれたと云ふ新地唄雪を聞きました實際良いものでした何れ江戸小唄の名稱を眞似た樣にこの新地唄の名稱を他社で眞似るでせう何にしても先鞭をつけると云ふ事は日東の方が巧いものだ（神戸　楠公前生）

▼近頃日東の哥澤レコードに努力して呉れる事が嬉しい新に加はつた芝滿力さんの唄は更に私達を喜ばして呉れる何卒芝滿力さんのレコードを毎月出して下さい（京都七條通　KK生）

▼吾が親愛なる日東よ管絃樂を出して下さい日東管絃團の近況は如何です暑さの爲やられてゐるのではありませんか、もうそろ〳〵涼しくなるうんと馬力をかけて良い作品を發表して下さい實際管絃樂のない月程淋しい時はありませんから何卒（大阪　千日前生）

▼何時も乍ら力松さんの美聲には惚々するヴエニスの舟唄戀慕小唄の素晴らしさはどうです今後どし〳〵書生節を吹き込んで下さい（東京淺草　東京松生）

▼拜啓毎々淨瑠璃レコード有難く存候駒太夫師の時雨の炬燵は四枚のみにて次は來月との事殘念に存候何と云つても淨瑠璃は日東の獨專物に御座候此の上共に淨瑠璃レコードをお出し被下度願上候（大阪府中河內　淺浪三五郎）

▼子供レコードをお出し下さい特に童謠ものを大分童謠が下火になつた樣ですがそれはいゝものがないからでせう何卒私達を喜ばすようなものをお出し下さい（名古屋中區　時光平太郎生）

▼大物を掘出して呉れる日東よ一日も早く纏つた長唄レコードを出して下さい元祿花見踊は迚も良かつたと思ひます又あの樣なものを何卒（播磨　名田生）

▼私は一日の仕事を終え歸つてきてから落語レコードでそのつかれを忘れてゐます殊に今月の春團治の喧嘩の仲裁はお腹の痛くなる程面白かつた實際春團治と云ふ人はしつかりしてゐるのか抜けてゐるのか分りませんれ何卒もつと面白いのを毎月お出し下さい（大阪難波　安部好太郎生）

▼佐藤香郎さんのハーモニカレコード出ませんが如何になつたのでせう、毎月出ものだと思つて樂しんで居ますのに何卒來月は是非共願ひます（神戸　愛好生）

▼私は古駒太夫師の淨瑠璃が大好きで、文樂へ師がかゝると大抵の場合は參ります、壺坂の次に何が出るのか知らと思つてゐます、出來るなら太十か二十四孝をお願ひします（大阪　古駒狂）

▼浪花亭綾太郎の浪花節はたいへん好きです曲目と言ひ吹込み具合と言ひ同時に出た他社のそれと全く違つたいゝ味がある（千日前）

落語の梗概

エゝ毎度お邪ま乍ら落語の梗概を申し上げる事に致します。演者はお馴染の桂春團治話します藝題は袈裟茶屋の二枚續き。先づ或る旦那衆が二人「茶屋遊びしようやないか」てな事になりましてそれも「普通に遊ばず一つ裸踊りをやらかそうやないか、その代り褌は縮面と朱珍の上等の切で造らう」と粋な相談、それを聞き付けた頓馬男「旦那わたひもお供を」とせがむのを「いゝ褌を締めて來たら」と云ふ旦那衆の言葉、喜んだ頓馬男早速お寺の和尚さんに巧く賴んで袈裟を借り受け、無茶な奴それで褌をかいて「へい上等の褌をして來ました」旦那衆もまさかそれが袈裟の褌とは氣が付きません「ちやついといで」とその頓馬男を連れて行つたばつかりに大滑稽を演じませうと云ふ春團治十八番のお話例に依まして囃鳴物入でお賑かに

て下さい特にワラー〳〵に於てお願ばかりで失禮（XY2）

▼ニツトータイムス九月號を拜見して內容の益々充實して來たのが氣に入りました名人傳は面白く拜讀しました是から永久に各種の藝術家を紹介して貰ひたい實際フワンに取つて名人の生立や略歴は堪らなく讀みたいものだどうか永遠に中止しない樣に重れてお願ひする（靜岡縣川崎町藤田平一）

▼詩吟のレコードが出ませんが早く出して下さい目錄の中の雜曲の隅にたつた一枚きりあるとは情な

大正十四年九月廿五日印刷
大正十四年十月一日發行
（毎月一回發行）
（定價一部金拾錢郵稅共）
▽半年分前納郵稅共金五拾錢
▽壹ケ年分前納郵稅共金九拾錢
▽雜誌は總て前金御註文の事
▽郵券代用は一割增
大阪市西成區玉出町一〇七二
發行兼編輯人　櫃　正直
印刷人　堺市車之町一三
印刷所　日東印刷所
發行所　大阪市住吉區住吉神社南門前
日東タイムス社
電話（戎長一〇五〇番 住吉一二一三七番）

ツバメ印ニットーレコード 總目錄

語學レコード

自 720 至 729 特赤 (文部省推薦) ニュークラウン リーダー第一卷 (十枚)

自 730 至 743 特赤 (文部省推薦) ニュークラウン リーダー第二卷 (十四枚)

自 744 至 753 特赤 (文部省推薦) ニュークラウン リーダー第三卷 (十枚)

自 754 至 759 特赤 (文部省推薦) ニュークラウン リーダー第四卷 (六枚)

自 760 至 765 特赤 (文部省推薦) ニュークラウン リーダー第五卷 (六枚)

ロンドン大學教授 文部省英語教授顧問 ハロルド、イーパーマ教授

780 特赤 ニューローレル リーダー第一卷 (全九枚ノ內三枚) 782 特赤

781 特赤 ニューローレル リーダー第二卷 (全八枚ノ內三枚) 791 特赤

790 特赤 ニューローレル リーダー第三卷 (全五枚ノ內二枚) 795 特赤

794 特赤 ニューローレル リーダー第四卷 (全四枚ノ內二枚) 797 特赤

798 特赤 ニューローレル リーダー第五卷 (全四枚ノ內二枚) 799 特赤

自 834 至 841 特赤 English Intonation (正確なる英語の抑揚) (八枚續)

自 1549 至 1549 特赤 (文部省認定) バーマ英語會話上達法 (七枚續)

ロンドン大學教授 文部省英語教授顧問 ハロルド、イーパーマ教授

自 1510 至 1529 特赤 Le Premier Liver de Français ou la famille Dupont 佛蘭西語の初歩 (全二十枚續)

ルイ、マルシヤン教授

獨奏

サキソホン、クラリネツト

1387 黑 ホリウッドそれ

1505 黑 (文部省推薦) ガールドブラックジョーズ

1663 黑 私の太陽 待宵草 前野港遊

1574 黑 (文部省推薦) クラリネツト 獨奏 Angel's Serenade. (エンゼルス、セレナード) Cavatina. (カバチナ) 進五郎 伴奏 コンパニオン夫人

シロホン

1707 赤 銀軍艦マーチ 鈴の音

1708 赤 雀の囀り 亀井湘南 管絃樂伴奏

バイオリン

249 黑 オールドフォルグス アットホーム ホームスイートホーム 杉山長谷夫 弘田龍太郎

379 黑 二重奏司伴樂 上下 380 黑 ワルツ、トリーステ ヂヤンソンボロネーズ ヘンリー レメディオス

507 黑 ホーム、スイートホーム トロイメライ 福井富之助

570 黑 ゼ、ホー、ミゾリーワルツ マザーアイムワイルド 遠藤和一

925 黑 トロイメライ、ラスト、ローズ、オブ、サンマー

945 黑 ユモレスク スイートホーム

1064 黑 ジョスランの子守唄 スコットランドの青い鐘 吉田吉之助 伴奏 岩淵繁藏

955 特黑 ロワルコツ

1324 黑 セレナーデ スプリングソング ブルメステル 田中平三郎 伴奏 鹽尻精八

1417 黑 (文部省推薦) GAVOTTE (ガボット) AIR VARIE (エアバリー)

1418 黑 ANDANTE RELIGIOSO (アンダンテレリギオソ) 九歳の提琴家

1573 黑 (文部省推薦) NORMA. (ノーマ) MENUET. (メヌエット) トーリヤ、ポツパ

1736 黑 Des Schwarze Domino. Marche Des Mandolinistes.

1386 黑 絃樂四重奏 カバレリアルスチカナ ハイドンのミヌエット 平井誠 橋田胖 山崎作信 間宮殺次

1479 黑 チゴイネルワイゼン フランセスコ フーサリオ

ピアノ

250 黑 春が來た 五月の舞踊 弘田龍太郎

842 黑 ベートーベン作 月光曲 上下

1078 黑 (文部省推薦) 春の調 糸績 女

1506 黑 1507 黑 (文部省推薦) ピアノの組織的練習とその實例 三 四

1557 黑 幻想的即興樂 ワルツ(嬰ハ調)(ショパン) ウヰリー バルダス教授

1029 黑 ハンティングソング ポロネイズ

1089 黑 パセティックソナタ 澤田柳吉

1410 黑 1411 黑 月光の曲 三 四

1197 黑 (文部省推薦) ヘツラー作 タランテラ、鱒 パウル シヨルツ

1888 黑 (文部省推薦) 土耳古マーチ(ベートベン) 雲雀(グリンカ) パウルシヨルツ

1713 黑 舞踏會の招待

ハーモニカ

812 赤 軍艦マーチ 末川勇
313 赤 君が代マーチ集第三番 同英二
1022 赤 聯隊らしの嬢 舞
1150 赤 ケーキルチの女 山中壽一
21 赤 ウイリアムテルの下に戰捷旗
965 赤 トロバトーレ ポイザー
1167 赤 即位行進曲 カルメン
1367 赤 元祿後花見 越前獅子踊 松尾金五郎
1234 黑 (文部省推薦) サンチヤゴ、ワルツ ドリゴのセレナーデ
1278 黑 椿姫 下上 川口章吾
1312 黑 オリヒンタルダンス スパニツシユヨーク
1389 黑 天國と地獄 ぞニスの夜曲
1235 黑 (文部省推薦) トレアドーロ ラ・パロマ
1244 黑 (文部省推薦) 薔薇の精 ホフマンの舟唄
1321 黑 (文部省推薦) ユーモレスク 序曲 ピツクダム
1452 黑 ヒンポニコン獨奏 トロバトーレ 下上
1499 黑 (文部省推薦) ニユーカレドニア リベラの舟唄
1598 黑 ヒンポニコン獨奏 カルメン 下上
1672 黑 カーニバルベニス コルネピユの鐘

叙情的吹奏者 佐藤秀郎

777 赤 ダンシング、ムーン ピールブリーアン 小林正二
843 赤 マーチ、ハイアローサ 柴笛 シユーベルトの子守唄 オールドブラックジョー 守田淑 金井節男
1322 赤 當選者の喜び 驚集 今澤トリオ
851 黑 バラーイカ コサックの踊 蜀奏 ルーマニアの唄 アレキサンデル ドブロホートフ

バラ、イカ、マンドリン、リユート

1149 黑 マンドリン春の宵 パナ 江川幸一
1621 黑 特 SALTARELLO (サルタレロ) BALLET DE FEE (バレーデフエー)
1622 黑 特 BORELO (ボレロ) GAVOTTE (ガボット)
1461 黑 特 (文部省推薦) RONDOC (ロンドー) DANZA DEI NANI (ダンザデナニ)
1462 黑 特 (文部省推薦) TARANTELLA (タランテラ) PAVANA (パヴアナ)
1463 黑 特 (文部省推薦) Liuto solo (第九前奏曲) IX PRELUDIO
1620 黑 特 1° CONCERTO 第一司伴樂第三樂章

Prof. Raffaell Calace ラフアエルカラーチエ Piano Hakujiro Kondo. 近藤柏次郎

オーケストラ

178 赤 セレナード・ラ・パロマ
179 赤 スクールライフ ンリー岬を舟出して
1065 赤 ワンステップチャン ワルツ ハワイの海岸を廻つて
1004 黑 カルメン抜萃 アイダ戰捷マーチ
1005 黑 林中の鍛冶屋 下上
1006 黑 アルルの女 下上
1347 赤 双頭の騎 驚 兵隊
1366 赤 ワンステップ フオツクストロット、ホワイ、ディーア 猫

スター管絃樂團 ローヤルツヤズバンド

市立大阪市民館管絃團

松竹管絃團

937 黑 (文部省推薦) 支那樂抜萃(ポープソング) (ウエヴディングプロセツション)
1195 黑 安南王の行列 羅浮仙
1032 赤 (文部省推薦) 磯鴨 綠江節 節
1153 赤 安來深川節
1158 赤 枯花園の戀 すゝき流涙の旅 森の娘
1210 赤 (文部省推薦) オリエンタルダンス キヤラバン
1302 赤 凱旋將軍 戰捷旗の下
1420 赤 鶴雞 鶴三番 曳 亀
1556 黑 (ゲーザオフアーモアーメ) By the Water of Minnetonka (バイザウオーターオフミネトンカ)
1148 黑 純粹支那樂 時新行街加快六

日東管絃團

390 黑 (文部省推薦) モリス、ダンス かつぽれ
1284 黑 炬火の江戸日本橋 踊
1394 黑 太湖船
1450 赤 アメリカンパトロール、ソレラ
1623 黑 ソラーソラー マイカートンガール

北京明清樂團

直川哲也指揮 管絃團

日東ジヤズバンド

管樂及喇叭

1146 黑 セブイラの珊髪師 ファウスト波萃
1147 黑 ドノ中ーノの美 美連
1254 黑 ウ井リアムテル 下上
554 赤 行進軍歌 橘中佐 金鵄勳章
605 赤 軍隊喇叭 日課號音

大阪市音樂隊

歩兵第三十七聯隊

41 赤 ハレルヤ、コーラス ロシントンポストマーチ
42 赤 國軍歌 艦行進
43 赤 浮かれ坊主（喜撰） 下上
44 赤 越後獅子 下上
45 赤 歌劇メン抜萃 下上
47 赤 ラスランドマーチ 合衆國野砲隊
48 赤 少年唱歌集 下上
516 赤 歌劇トロバトーレ 下上
517 赤 ジプシーライフ ネバーツーマッチ
549 赤 軍歌集 用鞄
552 赤 勸進帳 下上
824 赤 （文部省推薦）歌劇抜萃 リゴレット 圓舞曲ダモール

大阪三越音樂隊

元第四師團軍樂隊

獨唱

635 黒 リゴレット抜萃、女心 沈鐘抜萃、ハインリッヒの唱
6 黒 秋夜 ママ の集
7 黒 スヰートホーム 早春賦
8 黒 今様子守 笛の音唄
388 黒 夜のしらべ ローレライ
389 黒 ひろ、ほたる 旅愁
267 黒 夜の貝 あれて
285 黒 （文部省推薦）叱られて 庭の草
830 黒 戀はやさし セヴィラの理髮師

大津賀八郎
水野康孝
伴奏 湯前純親
唄 杉本あや子 伴奏 湯前純親 助奏 土屋もと子
伴奏 弘田龍太郎
水野康孝
安藤文子

1152 黒 （文部省推薦）賓早 千春 鳥賦
1286 赤 待宵草、街の女 天女の子、樂
1173 黒 （文部省推薦）親書 なのし 鳥夢
1174 黒 （文部省推薦）ジョフランの子守唄 ソルヴェチの唄
1370 黒 歌劇ワルキューレの中 戀の唄 飯の唄
1371 黒 幸福のしるしきものよ
1372 黒 ラ、ボヘーム ローエングリン
1392 黒 セレナーデ
1393 黒 （文部省推薦）ロレライ 聖き夜
1323 黒 （文部省推薦）マルーシャの唄 ゆく春
1449 黒 城ケ島の唄 雨
1558 黒 馬やの賣木 かり山
1016 黒 ロカロ、マミオ、ベンス
1056 黒 荒城の月 松の葉、子守唄
1391 黒 ホームスソング
1255 黒 久方もの 月かめ
1014 黒 櫓立、街の子、空に眞赤な夕焼 死の勝利
1059 黒 蓮セレナード の花
1308 赤 舞踊小曲 つばめ 上下
1373 黒 ロハウのに 接唄て
1409 黒 ボトラヘビアタム
1464 黒 カバレリアルスチカナ
1692 黒 フアウスダイ アウスト

若谷冬子
伴奏 湯前純親
伴奏 竹中喜三 若谷冬子
水野康孝 伴奏 湯前純親 助奏 土屋もと子
廣瀬八重子 伴奏 湯前純親 助奏 土屋もと子

オット、ベック

荻野綾子
伴奏 山田耕作

藤原義江
伴奏 近藤柏次郎

廣瀬八重子
伴奏 北田政江

原田潤 伴奏 鹽尻精八

松竹樂劇部 筑紫國子

ロース、シャック

ザヌタ、ルビニ

合唱

1313 黒 （文部省推薦）城ケ哀れの島の雨 少女
1476 黒 オーナソレミオ トーナソリヒント
1475 黒 （文部省推薦）RIGOLETTO（リゴレット） Ballata (Canzone)
1484 黒 （文部省推薦）Cant (ler Fascisti（青春の唄） Cavalleria Rusticana（カヴァレリア・ルスティカーナ）

水野康孝 伴奏 鹽尻精八 助奏 田中平三郎
ドメニコ、カミサシ
ルイギ・フアウダ

36 赤 春の三つの野 舟
37 赤 花野 下遊舟び
980 黒 椿姫 西鑛の娘
1374 黒 （文部唱）ジプシーの女王 ファンシングスフェー
1478 黒 （文部唱）マダムバタフライ ラ、ボヘーム

ウヰルミナ女學校コーラス團
大津賀八郎 青木春子
ロース、シャック オット、ベック
ゲセピナメリコニ レイギフアウダ

唱歌

162 赤 大阪市歌 大阪青年聯合團歌
832 赤 少年團の歌 ジャンボリーマーチ
584 赤 鳩ポッポ 青葉花咲く
771 赤 牛若丸、兎と龜、燕、案山子、桃太郎、金太郎、
1134 赤 大正震災唱歌 帝都復興の歌
1415 赤 （文部省推薦）君勅語ケ奉 答代
1351 赤 琴伴奏 日の丸の旗、桃太郎 春が來た、池の鯉
1349 赤 琴伴奏 荒城の月 故郷の廢家

永井幸次 長井齊
水野康孝 元近衛軍樂隊
宮崎伊都子 晴江
水野康孝 伴奏 澤田柳吉
ミチル學園兒童
大日本家庭音樂會 唄 坂本勝子 琴 米谷玉枝 森田澄子

115 赤 小馬、道は六百八十里、案山子月、花咲爺、おたまじやくし
116 赤 烏はカアカア、起上り小法師、浦島太郎、辨慶
142 赤 勇戰敢なる水兵友
143 赤 桃太郎さん、婦人從軍歌、かたつむり、兎と龜、汽車、
188 赤 富士、紅葉、ひよこ、田植、
1136 赤 君が代御成婚奉祝唱歌
557 黑 お伽唱歌、日本一
444 黑 童話唱歌六段笑歌
187 赤 日の丸、鳩、人形春が來た、茶摘み、汽車
1572 赤 鳩、兎と龜、ひよこ、日の丸の旗、
1594 赤 おやがり、ぼし、小馬、小き兵士、浦島太郎、
1604 赤 ねなかの海の四季日本々戰
1477 赤 桃太郎、烏、かたつむり、日本男兒、兎、
1605 赤 汽車、人形、時計の唄、村の鍛冶屋、なんだつけ、

日東演藝部員

片岡久子
管絃樂伴奏

日東少女歌劇團

西脇時子
管絃樂伴奏

英語唱歌レコード

1008 特赤 (文部省推薦)
English Song
Old Folks at Home.
Old Black Joe.

1009 特赤
English Song
Home, Sweet Home
My Old Kentucky Home

1706 特赤
Little Bo-Peep.
Goosey Goosey Gander.
The Alphabet.
The Three Little Kittens.
Ding Dong Bell.
Pussy cat, Pussy cat.

ドローシー、パーヤー

童話及童謠

768 黑 童謠 お砂場遊び、嬉の唄月に浮れて

東京童謠音樂研究會々員

846 黑 童謠 傘屋さん、寢る時起る時、小人の號外、がんざりお眼々

中央音樂會
島田壽美江

1628 赤 林檎の歌 あされ、なつめ、き

藤井美枝子

1741 赤 青い鳥、母さん里、泊り舟、夏の鶯

ミチル學園
小橋みち代

1744 赤 お地祭、震、お磨店の盆

野澤照子

1735 赤 童文話 福茶釜

兒童レコード協會

924 赤 童話 第一の夜

大阪アカネお伽學院

845 赤 童村話 祭り

立花家花橘

三絃童謠

1270 黑 (文部省推薦) 赤とんぼ、お池の鯉細い雨、金魚、人形、小鴉

糸杵屋佐吉
唱森きみ子

1385 黑 (文部省推薦) 靴下、飴屋の笛、しやぼん玉蜜柑、小鳥の巣、鼠の宿替

1734 黑 竹鍬 觀音樣のおびんづる

兒童劇及歌劇

110 赤 福の神

國際少女歌劇團

111 赤 白雀

141 赤 胡弓師の唄

230 赤 祭の夜

264 赤 道成寺

831 赤 少年團員野外生活 野營の夕

東京少年團員

829 赤 對話劇 兵隊ごつこ

632 赤 子供スケッチ 迷ひ兒の櫻ん坊

兒童レコード協會

553 赤 喜歌劇 寢呆け相撲

住吉少女歌劇團

421 赤 童話唱歌 お正月

422 423 赤 童話歌劇 珍念と齋念

佐々紅華指導
井上起久子
堀田金星
高井ルビー
他大勢

684 690 691 692 黑 お伽歌劇 かちかち山後日譚 杵響響の仇討

637 赤 童話劇 雀の學校

814 赤 芝居ごつこ

817 赤 童話劇 花まつり

850 赤 童話劇 似せ地蔵

869 赤 おもちゃの世界

944 黑 兒童劇 こども座

1161 黑 童話劇 續こども座

982 黑 兒童劇 コンキチ孤

1027 黑 兒童劇 月の子供

1067 黑 教訓童話劇 美代子の夢

1108 黑 童話劇 松虫鈴虫

1164 赤 動物の手柄

大阪アカネ
お伽學院

1272 赤 地獄の演藝會

澤田柳吉指導
日東歌劇團

1375 赤 瘤とり

445 黑 (文部省推薦)對話入お伽唱歌 人形觀兵式

446 黑 (文部省推薦)對話入童話唱歌 花子の旅

776 赤 春姫の音樂

日東歌劇團

1194 赤 ギードビル

東京少女歌劇團

828 赤 お伽落語 苗賣り

879 赤 お伽唱歌劇 ばん子の失敗

447 赤 お伽活動劇 なまけ者黑助

木村時子
相良愛子

816 赤 忍術五郎 下上 — 晉羽目子 江原鉄子 根島甫 津美夫 新

246 247 248 黒 バンドマンの喜歌劇（三枚一組） — 英國喜歌劇團 バンドマン

911 972 黒 藤六の人形 三四

1070 1071 黒 喜道歌劇 中日記 三四

1106 1107 黒 お伽歌劇 狐の裁判 三四

1354 赤 赤ん坊になつた婆さん

1416 赤 新年お目出度

1683 赤 お伽芝居 猿蟹合戰 下上

寶塚少女歌劇

東京少女歌劇團

ミチル學園

428 赤 喜歌劇 法師 下上

429 赤 歌劇 那須馬市 下上

430 451 赤 歌劇 月光曲 其一、二 各下上

1 黒 評劇 龍井寺由來 下上

921 922 黒 神話劇 すくなびこな 下上

932 黒 喜歌劇 蘇生 下上

1001 黒 歌劇 貞任の妻 下上

1057 1058 黒 アミナの死 三四

1121 黒 お伽歌劇 兄さん閉口 下上

1145 黒 評劇 人格者 下上

1209 黒 お伽歌劇 ちこがれ 下上

1365 黒 薔薇の精 下上

高野日花子 春香久子 天沖秋高奈音瀧若巽雲仕 砂松子 野田津田峰妙露泡妙子 日花子 香久子 瀧羽末川君美子 寿美也子 榮子 美子 富士子 江津乙女 岸子

映畫劇及說明

1096 赤 不如歸 下上 — 諸口十九 川田芳子

1093 1094 赤 霧の小路 三四

1095 赤 酒中日記 下上 — 岩川茂吉 田芳祐 岡島艶子

1550 1551 1552 黒 カルメン兒殺し 三四 — 五月信子 高橋義信 藤間林太郎

986 987 赤 太平洋の風 三四 — 高橋鶴壇

39 40 赤 運命の十字街 三四

345 赤 寃の森 下上 — 山崎錦城 管絃樂伴奏

36 368 赤 幽靈船 三四

880 881 赤 東への道 三四

930 赤 （文部省推薦）さすらひの姉妹（安來節クラリネットソロ） 下上

931 赤 藻の花 下上

1211 赤 水郷の唄（小唄の入） — 花井三昌 管絃樂伴奏

1033 赤 金色夜叉（書生節入） 下上

1087 赤 人肉の市 下上

592 赤 島女（オーケストラの江州音頭入） 下上

1264 1265 赤 大正軍人美譚 大和魂（汽車、ラッパ、軍歌入） 三四

1303 赤 流浪の旅（小唄の入）

1700 赤 村の牧場

336 赤 典島情話

1487 1488 赤 十誡 三四 — 伍東宏 木狂郎 松

筑前琵琶

530 531 赤 一度は凡ての女に 三四 — 椿三郎

1419 赤 關の五本松 下上

1448 赤 嘆きの孔雀 下上 — 花井三昌 唄間君代 管絃樂伴奏

1679 1680 赤 復活 三四

400 401 402 赤 本能寺 三四

520 521 赤 扇の的 三四

326 327 440 赤 義士の本懷 三四

324 325 赤 （文部省推薦）常盤丸 三四

531 532 赤 文部省推薦 乃木大將 三四

328 329 330 赤 湖水渡 三四

333 赤 大高源吾 下上

613 614 赤 赤垣源藏 三四

1042 1043 赤 橋中佐 三四

342 343 344 赤 新曲 石童丸 三四

豊田旭鶴

豊田旭嬢

薩摩琵琶

1595 1596 赤 扇の的 三四

1619 赤 靜御前 下上

1696 1697 赤 太田道灌 三四

法明山 秋根旭嬢

1172 赤 羅生門 下上 — 桃木耳水

1398 赤 (文部省推薦) 小督 下上
518 519 赤 別れの國歌
855 856 赤 臺灣入 三四
644 645 646 647 赤 石童丸 三四 三四 三六
1039 1040 赤 敦盛 三四 三四
194 赤 (文部省推薦) 常陸丸 下上
195 赤 別れの盃 下上
196 赤 城山 下上
197 赤 (文部省推薦) 本能寺 下上
198 赤 毒饅頭 下上
199 赤 (文部省推薦) 川中島 下上
200 赤 (文部省推薦) 橘大隊長 下上
236 赤 櫻井の驛 (小楠公上の卷)
237 赤 河内の宿 (小楠公下の卷)
1353 赤 光秀の最後

宗家 永田錦心

帝國派薩摩琵琶 宗家 松田翠濤

吉村・岳城

飯牟禮壽長

276 赤 ピアノ四季の唄 三絃合奏 春
719 赤 お江戸日本橋 梅に
823 赤 活川惚 深
878 赤 越後獅子 下上
1122 黒 調和樂さん 奴元祿花見踊
844 赤 長唄 岸の柳 下上
976 赤 吉原雀 下上
1327 黒 (文部省推薦) 春香に迷ふ雨
168 赤 三十三間堂 (尺八太) 野崎村 (細合奏)
1395 赤 (文部省推薦) 三曲合奏 琴三絃合奏 松上の鶴 都の春
1474 赤 春の曲

ピアノ三絃 力田芳憧 日東藝部員 松

琴菊香せいこ 三味線幸琴女 酒井城護 竹保

琴楯城設 尺八酒井竹保

ピアノ佐々紅華 三絃南地金八

力 吹奏樂伴奏 松

ピアノ三絃 澤田柳吉 三味線 石澤紫水 フリュート 清水三好 ヴァイオリン 杉田良造

尺八上田芳憧 三味線伊藤峰憧 杵屋君郎 米屋君四 福

石澤紫水一行

合奏

新内

696 637 赤 花井お梅 三四
1084 1085 黒 明烏 三四

唄吾妻路宮古太夫 糸富士松亀三郎

1631 赤 短登りか下り夜
1699 赤 時雨降つまる 附

唄哥澤芝滿力 糸哥澤芝滿龍

哥澤

485 黒 うす墨に雀 附竹 下上
486 黒 淀の川瀬 下上
525 黒 ほゝゑむす藏野 (今一聲)
631 黒 住吉 下上
648 黒 戀すてふ 下上
849 黒 紀伊の國 下上
1571 黒 重ねひ扇 ぐす
1092 赤 今朝の雨 重扇
1099 赤 宇治所 忍ぶは戀茶路
1437 赤 心送でると玉め章て
1165 赤 ほん紺に思前の へば 附
392 赤 綱 上 下上
1287 赤 登夜り月が下り すら
1721 赤 枯野富士 ゆやかし淺き間
1337 赤 わ附し米が 國山
1670 黒 松葉ゆかた 下上

家元 哥澤芝金 芝勢以

芝爲代 芝爲枝

芝爲代 芝爲枝

芝爲代枝

1689 1690 黒 雪 三四
1719 1720 黒 茶音頭 三四

唄糸 あい豆 吉川幸滿 琴 せつ奴 尺八上田芳憧

新地唄

清元

638 特黒 **保名**
一 戀よこひより
二 うらやまマデ
三 野邊のかげろふ
四 夜を明しマデ
五 畫寢ぬ樹に沈むヨリ
六 伏マデ

699 持黒 700 特黒 **三千歳**
一 灯携へ立出てヨリ
二 返るヨリ
三 今鳴子の鳴つてヨリ
四 恨めしそうな顔を見たヨリ
五 嬉か別れてヨリ
六 段切マデ

1101 特黒 1110 特黒 1102 特黒 **十六夜清心**
一 朧夜にヨリ
二 よいとのくにヨリ
三 聞く辻占にヨリ
四 珠數の緒をマデ
五 合たまく逢ふにヨリ
六 十九の厄年にマデ
七 我が身も同じヨリ
八 終マデ

1651 特黒 1652 特黒 1953 特黒 1654 特黒

三味線
四世 清元榮壽太夫
五世 清元延壽太夫

1200 特黒 1201 特黒 **神田祭** 三四

文部省推薦 **かさね（一段）**
一 思ひ氣をもにマデ
二 女
三 情い道さへヨリ
四 見染めたがマデ
五 ほんに結ぶのヨリ
六 口ごもるマデ
七 ハテ是非にヨリ
八 一ふしはマデ
九 夜や更けてヨリ
一〇 胴慾なマデ
一一 もしやヨリ
一二 をかわしマデ
一三 身なやヨリ
一四 なう情なやマデ
終マデ

703 特黒 702 特黒 701 特黒 706 特黒 705 特黒 704 特黒 707 特黒

明烏（一段）
一 白雪のヨリ
二 一遍のマデ
三 回向を賴むヨリ
四 はたと締にけりマデ
一 折節降り來るヨリ
二 今日の夢マデ
三 今は我身ヨリ
四 段切マデ

1340 特黒 141 特黒 1342 特黒 1343 特黒

三味線
四世 清元榮壽太夫
五世 清元延壽太夫

文部省推薦 **海波** 上下

1202 黒 青

清元正太夫
三味線市之助
清元榮太夫
三味線榮次郎

1000 黒 櫂 上下

1315 黒 文部省推薦 **陸垂れ** 上下
唄 立花家美之助
糸 立花家橘之助
ツレ 立花家喬之助

1408 黒 米山 上下

1130 赤 131 赤 **浦島**
三 三四 南地大和屋 舞踊團

1175 黒 1176 黒 **長唄曲引**（文部省推薦）
三 唄 立花家美之助
三味線 切代 立花家橘之助
ツレ 立花家喬之助
文福たぬきの曲 三四

1191 黒 1192 黒 1193 黒 **君の庭**
三 三四 唄 富士田音藏
三味線 杵屋佐吉
杵屋和吉
杵屋勝雄
三 三四 芳村伊四郎
三 三四

655 黒 657 黒 **鶴亀**
三 三四 唄 三杵屋佐次郎
上 杵屋佐次郎
三 三四

自 801 至 806 黒 （文部省推薦）**勸進帳**（全曲）
付 元祿花見踊
自 一 至 二
笛 望月太左衛門
望月太喜之助
小梅屋金太郎
大六郷新十郎

1030 黒 1031 黒 **望月**
三 三四 唄 中村六三郎
三 三四 杵屋六桃次
杵屋勝六

1156 黒 1157 黒 **小鍛冶**
三 三四 笛 小田中佐十郎
望月太喜四郎
太田中傳四郎

121 赤 **春雨傘**
上下 三代目中村兵藏
杵吉六次郎

258 赤 299 赤 **あやめ浴衣**
三 三四 唄 芳村孝次郎
三 三四 杵屋勝太郎
三 三四 杵屋勝助
三 三四 笛 望月太喜之助
望月朴清
太鼓望月光之助
堅田喜惣治

308 黒 309 黒 **楠公**
三 三四

3664 黒 3665 黒 **連獅子**
三 三四
三 三四

112 赤 113 赤 **望月**
二 三四 大阪新町六 女の花會

自 872 至 874 黒 **五條橋**（全曲）
付 三味線の曲
清瀧の三重
自 一 至 二
シテ 芳村伊十郎
ワキ 芳村伊四郎
三 杵屋榮藏
笛 望月朴清
小鼓 田多藏
大鼓 榮二郎
太喜右衛門 長大郎

1482 黒 1481 特黒 1480 特黒 **文屋（一段）**
一 えぼしきたり
二 あるまいかマデ
三 寄るな奥きのけ
四 隅田川マデ
五 合、男よけならヨリ
六 終マデ

118 赤 **神田祭** 下上
吉原〆廻家〆太松

三味線
四世 清元榮壽太夫
五世 清元延壽太夫

1155 黒 つがひはなれぬ、惚れて通へば 五月雨、咲いた 梅

1160 黒 虫の音、こ春出、風 島

1208 黒 三つの車、都々逸くづし ぬれてしつぽり、坂は濡るく

1248 黒 よりかゝりし、休日 三日月ぬれぬ先から

1267 黒 月は田毎、植えてみよ、 われが住家、三下り時鳥、

1339 黒 鈴ヶ森、敷寄屋縮、竹の桂 浮名、たつかや

1355 黒 浮世は 仇なさ 嘆

1436 黒 忍ぶ戀路、あの花、わしが思ひ

1470 黒 （文部省推薦）夕ぐれ 待ちわびて、飄 簞

1503 黒 粋な浮世、七段目、夜 櫻

1570 黒 辻君、いつしかに 秋の夕、雪のあした

1608 黒 さつまさ、三國、時雨降る

1642 黒 鴉 餌して、田 歳に一度 隅 堤

1668 黒 殘る月、川風、筆のかさ

1722 黒 青き柳 雨の

1682 黒 春雨 逢ふて別れて

唄 立花家美之助
糸 立花家橘之助
替手 岩泉米吉

初代
唄 立花家美之助
糸 立花家橘之助

江戸小唄

1421 特 黒 **賤機帯**（全曲）

一 名にし吾妻ヨリ 二 狂乱のヤデ

1422 特 黒

三 正體なきこそヨリ 四 花たすくはんヤデ

1423 特 黒

五 あち心なのヨリ 六 終りヤデ

1424 特 黒 **吾妻八景**（全曲）

一 實にゆたかヨリ 二 聲高輪に、合ヤデ

1425 特 黒

三 はるかあなたヨリ 四 紙ぎぬた、合ヤデ

1426 特 黒

五 忍ぶもじ摺ヨリ 六 終りヤデ

獨吟 吉住小三郎 三味線 杵屋六四郎 ワキ 杵屋六次

1427 特 黒 **紀文大盡**（全曲）

一 鳥も通よはぬヨリ 二 八百五十輛ヤデ

1428 特 黒

三 ひけやひけ〳〵ヨリ 四 恥かしやヤデ

1429 特 黒

五 實に世の中ヨリ 六 心得ましたヤデ

1430 特 黒

七 帯間の二朱判ヨリ 八 終りヤデ

唄 杵屋榮三郎 芳村伊十郎 榮二郎 藏

笛 住田長朴 望月太左衛門 小林清 大喜多 太右衛門

自 1 至 8 黒 **鷺娘**（全曲）

自 493 至 496 黒

自 500 至 503 黒 **春興鏡獅子**（全曲）

自 1 至 14

60 602 黒 **筑摩川**

119 120 赤 **吉原雀**

145 146 黒 **鞍馬山**

1256 赤 長唄稽古用 松の緑 上 下

1299 1310 赤 長唄稽古用 岸の柳 付五の大力 三 三

1369 赤 長唄稽古用 蓬莱 上 下

1376 1377 1378 赤 （文部省推薦）長唄稽古用 越後獅子 三 三 三 六

1345 1346 赤 長唄稽古用 外記節狼 三 三

1439 1440 赤 長唄稽古用 傾城 三 三

1473 赤 長唄稽古用 都鳥 上 下

1485 1486 赤 長唄稽古用 五郎 三 三

1559 1560 1561 赤 長唄稽古用 新曲浦島 三 三 三 六

1590 1591 1592 赤 長唄稽古用 四季の山姥 三 三 三 六

1630 赤 長唄稽古用 折すだれ 上 下

1681 赤 長唄稽古用 初しぐれ 上 下

1742 1743 赤 長唄稽古用 汐くみ 三 三

杵屋登美 杵屋六喜正 糸

自 1295 至 298 黒 **娘道成寺**（全曲）

自 1 至 8

1606 1607 黒 **元祿花見踊** 三 三

712 713 黒 **若菜摘** 三 三

唄 吉住小桃次 杵屋和三郎 杵屋喜次郎 杵屋左吉 望月長之助 笛 望月吉三郎 望月長四郎 太 望月鶴太郎 左吉

唄 三上 杵屋元三郎 杵屋藏 笛 望月長太郎 望月小福原 太 望月福原百之助 左

唄 芳村伊四郎 杵屋和吉 杵屋三郎 杵屋喜次郎 杵屋左吉 望月長之助 笛 望月吉三郎 望月長四郎 太 望月鶴太郎 左吉

自 1280 至 1283 黒 **賤機帯**（全曲）

自 1 至 8

1639 1640 1641 黒 外記節狼 附三絃主奏樂道化の曲 三 三 五

唄 松島庄十郎 杵屋佐吉 杵屋百之助 伊三郎 金太郎 笛 望月梅屋 望月柏原 萬藏

唄 杵屋美和次郎 ワキ 杵屋美和吉 望月久三郎 望月佐吉 笛 望月太左衛門 望月喜三郎 太 望月小三郎 左

573 574 575 黒 **吾妻八景** 三 三 六

941 942 943 黒 **鞍馬山** 三 三 六

1035 1036 1037 黒 **越後獅子** 三 三 六

1330 1331 1332 黒 **網館** 三 三 六

1490 1491 1492 黒 **老松** 三 三 六

唄 富士田音藏 杵屋巳太郎 望月太左衛門 心連中 小三郎

唄 芳村伊四郎 杵屋和吉 糸 ワキ 杵屋美和次郎 望月久三郎 望月佐吉 笛 望月太左衛門 望月喜三郎 太 望月小三郎 左

自 910 至 915 黒 **關の扉**（一段）

自 1 至 3

松尾太夫 文字兵衛 治

自 1051 至 1056 黒 **釵**（一段）

自 1 至 3

松尾太夫 文字兵衛 梅

自 487 至 492 黒 **戻り橋**（一段）

自 1 至 3

松尾太夫 文字兵衛 菊三郎

自 655 至 662 黒 **乘合船**（一段）

自 1 至 10

松尾太夫 文字兵衛 菊三郎

自 1280 至 1283 黒 **釣女**（一段）

自 1 至 8

松尾太夫 文字兵衛 菊三郎

自 1316 至 1319 黒 （文部省推薦）**宗清**（一段）

自 1 至 8

松尾太夫 文字太夫 菊三郎

自 1379 至 1382 黒 **將門**（一段）

自 1 至 8

松尾太夫 文字太夫 菊三郎

義太夫

自522 至524 黒 松島（一段） 自一 至六 松尾太夫 文字兵衛 菊三郎

1304 1305 赤 三勝半七酒屋の段 三四

1352 赤 三十三間堂 下上

1399 赤 朝顔宿屋 下上

1451 赤 （文部省推薦）太功記十段目 下上

1638 赤 二十四孝 下上

1726 赤 新口村 下上

自1220 至1229 黒 野崎村（一段） 自一 至一〇

自1611 至1618 黒 壺坂（一段） 自一 至六

竹本錦太夫 糸 鶴澤清六 豊竹古靭太夫 糸 豊澤猿太郎

竹本錦太夫 糸 豊澤新左衛門

自663 至675 黒 阿古屋琴責の段（一段） 自一 至六

1028 赤 朝顔宿屋（琴唄）

自1110 至1119 黒 忠臣蔵茶屋場（一段） 自一 至一〇

竹本越登太夫 糸 鶴澤清丸 豊竹古靭太夫 糸 鶴澤清六 竹本錦太夫 竹本靜太夫 竹本綠太夫 竹本八十太夫 竹本越名太夫 竹本越登太夫 豊竹つばめ太夫 豊竹辰太夫 糸 鶴澤清六 竹本越登太夫 糸 鶴澤淺造 豊竹古靭太夫 糸 豊澤新左衛門 三味線 豊澤猿太郎 竹本靜太夫 竹本錦太夫 竹本錦太夫 竹本越登太夫 豊竹島太夫 豊竹古靭太夫 糸 鶴澤清六 豊竹古靭太夫 糸 鶴澤芳之助 竹澤團六

369 赤 中將姫 下上

346 347 赤 （文部省推薦）先代萩 三四

441 赤 朝顔日記大井川 下上

926 赤 新口村 下上

927 赤 新口村さわり 下上

600 赤 玉藻前三段目 下上

129 赤 明烏 下上

1188 赤 明烏奥 下上

650 赤 三勝酒屋の段 下上

807 赤 太功記十段目 下上

808 赤 太十さわり 下上

767 赤 阿波鳴戸 下上

319 赤 廿四孝 下上

320 赤 戀十三吉子別れ 下上

967 赤 柳（三十三間堂） 下上

979 赤 鈴ケ森 下上

988 赤 時雨の炬燵 下上

1034 赤 壺坂 下上

1066 赤 野崎村 下上

1151 赤 八陣本城 下上

1199 赤 朝顔日記（さわり） 下上

1279 赤 寺子屋 下上

1333 赤 日吉丸 下上

1126 赤 新口村 下上

1489 赤 白石噺 コレ此廊へ ぬるゝ計りなり ヨリマデ

竹本越登太夫 糸 鶴澤淺造

1593 三 吉愁歎 下上 竹本越登太夫 糸 鶴澤淺造

自404 至414 黒 合邦ケ辻下の卷（一段） 自一 至三

自615 至622 黒 本藏下屋敷（一段） 自一 至六

自80 至83 自90 至95 黒 御所櫻三段目（一段） 自一 至六

自335 至341 黒 加賀見山又助内（一段） 自一 至四

自222 至227 黒 忠六（一段） 自一 至三

自83 至89 自155 至158 黒 寺子屋（一段） 自一 至三

903 906 赤 白石噺揚屋の段 三四

999 赤 日吉丸 下上

自474 至484 黒 （文部省推薦）堀川猿廻し（一段） 自一 至三

951 黒 逆櫓 下上

256 257 258 赤 掛合淨瑠璃 千本櫻道行 三四 三六

362 363 赤 掛合淨瑠璃 橋辨慶 三四

自882 至889 黒 双蝶々引窓の段（一段） 自一 至六

豊竹古靭太夫 糸 鶴澤芳之助

竹本錦太夫 糸 竹澤團六

豊竹古靭太夫 糸 鶴澤清六 糸故 鶴澤芳之助

豊竹古靭太夫 糸故 鶴澤清六

竹本靜太夫 糸 鶴澤芳之助

文樂座若手連 豊竹つばめ太夫 豊竹辰太夫 竹本越登太夫 糸 鶴澤淺造 鶴澤清丸 鳴物 望月社中

豊竹古靭太夫 糸 鶴澤芳之助

1260 赤 掛合浮瑠璃 三
1261 赤 妹背山道行 三
1262 赤 （戀の小田卷） 丟

自 1453 至 1460 黒 三勝半七酒屋の段（一段） 自一 至一六

豐竹つばめ太夫
竹越名太夫
竹本越登太夫
豐竹辰太夫
糸竹澤團六
鶴澤淺造
竹澤團二郎
鳴物文樂社中

自 1643 至 1750 黒 時雨の炬燵（一段）

豐竹駒太夫
糸鶴澤才治

206 赤 阿波鳴戸 下上
207 赤 紙治炬燵 下上
208 赤 太功記十段目 下上
245 赤 三勝酒屋 下上
270 赤 靫 坂 二一
283 赤 三十三間堂 下上
334 赤 合 邦 下上
69 赤 太鈴 功記ケ十段目 森
70 赤 新口村 下上
94 赤 日本藏 吉下屋敷 丸
97 赤 壺 阪 下上

元豐竹昇之助事
玄番米子

北陽 吉助

34 赤 堀川猿廻し（まわし） 一
35 赤 堀川猿廻し 四三
30 赤 朝顏宿屋（琴唄） 下上
83 赤 野崎（連引）村 下上

豐竹呂昇
豐竹琴喜呂昇
ツレ金昇

24 赤 三勝酒屋 下上
25 赤 阿波鳴戸 下上
26 赤 先代萩 下上
27 赤 三十三間堂 下上
28 赤 朝顏日記大井川 下上
29 赤 玉藻前三段目 下上
32 赤 壺 坂 三四

豐竹呂昇

514 黒 四郷と豚姫 三四
515 黒 實川延若 市川東壽三郎 外大一 荒太郎 座

124 黒 彦山權現誓助劍 三四
125 黒
126 黒 鎌 腹 下上

159 黒 梅川忠兵衛封印切 三四
160 黒
161 黒

實川延若
長唄淨瑠璃
囃子連中

426 赤 橘供養 梵字文覺
427 赤 那智山纏の塲 三四

市川右團治
市川新外
外大一 座

540 黒 三日月次郎・吉 三四
541 黒
542 黒 義經千本櫻
54 黒 いがみの權太 三四
544 黒 大 盃
545 黒 三四
547 黒 内藤紀伊守邸大廣間の塲 三四
548 黒 おつま八郎兵衛怨みの鮫鞘 三四

實川延若
市川荒太郎
淺尾壽三郎
市川大吉
坂東一座
他囃子方連

451 黒 濱政宮殿下攀覽紀念 三四
452 黒 桶公 秋別 三四
453 黒

尾上松之助一座

19 赤 守日參劇 蓮
20 赤 龍の口御難の塲 三四

嵐璃德一座

424 黒 松平長七郎 日本橋の塲 三四
425 黒

片岡我童
大一座

681 黒 菅原車曳の塲 三四
682 黒

633 黒 忠臣藏
684 黒 茶屋塲 三四
685 黒 三兵
686 黒 七
687 黒 卒

587 黒 馬方丑五郎 三四
588 黒 三兵
589 黒

961 黒 馬方丑五郎本陣講釋塲 三四
961 黒

558 黒 御所の五郎藏（五條坂出逢の塲） 三四
559 黒 三兵
560 黒

561 黒 髮結新三（深川富吉町髮結新三内の塲） 三四
592 黒 三兵
563 黒

564 黒 め組の喧嘩（焚出喜三郎内の塲） 三四
565 黒 三兵
566 黒

557 黒 辨天小僧（濱松屋店先の塲） 三四
568 黒 三兵
569 黒

416 黒 藤十郎の戀 三四
417 黒 三兵
418 黒

397 黒 心中天網島 三四
398 黒 紙屋治兵衛内の塲 三兵
399 黒

860 黒 熊谷陣屋 三四
861 黒 三兵
862 黒

375 赤 國定忠治 山形屋乘込の塲 三四
376 赤

509 赤 續國定忠治 山形屋强請の塲 三四
510 赤

821 赤 前 鑑 國定忠治 赤城天神山不動の森の塲 三四
822 赤

458 黒 （文部省推薦）大菩薩峠 三四
459 黒 三兵
460 黒 初編 芝新錢座浪宅の塲 三兵
461 黒 七
462 黒 次編 庵原村古寺の塲 三四
463 黒

537 黒 箕輪心中 三四
538 黒

891 黒 月形半平太
892 黒 眞葛ケ原の春雨 三四
893 黒 三本木の夕 三兵

實川延若
中村福助
嵐吉三郎
中村雀右衛門
實川童
中村鳳治郎

尾上卯三郎
尾上喜久太郎
大一座

尾上菊五郎
大谷友右衛門
他大一座

中村雁次郎
中村福助
外一座

澤田正二郎
大一座

1080 1081 黒 史劇城山の月 可愛ケ嶽の塲 洞窟の塲 澤田正二郎 大一座

新派劇

470 471 472 473 赤 白蓮紅蓮 初編 三春家菅理人事務室 次編 三春家蓮池の畔 三 三 三 三 新聲劇幹部

628 629 赤 前編 金色夜叉 三 三 和歌浦糸子 松涙義雄

581 582 赤 七年後の金色夜叉 三 三 松涙義雄

627 赤 時嘘事新劇 高 下上 松涙義雄 和歌浦糸子

858 859 865 866 赤 己ケ罪 三 三 三 三 都一芝雀男 中村藝座

292 黒 思ひ妻 下上 河合武雄 武田正憲 外大勢

293 294 黒 已が罪 三 三 河合武雄 武田正憲 外大勢

919 920 黒 太郎冠者作 ドッチヤダンネ 三 三 帝劇女優

1691 黒 ？ ハラナ

喜劇

456 457 赤 心の脱線 三 三 曾我廼屋五郎 大一座

454 455 赤 百行の基 三 三 曾我廼屋五郎 大一座

529 赤 短慮の及 下上 曾我廼屋五郎 大一座

612 赤 若き日の影 下上 曾我廼屋五郎 大一座

638 639 赤 曉の鐘 三 三 曾我廼屋五郎 大一座

931 992 993 赤 震災餘聞 情火 三 三 三 曾我廼屋五郎 大一座

928 929 黒 命の衝立 三 三 曾我廼屋五郎 大一座

994 赤 地震に因みて 武藏野の狸 上 下 曾我廼家五郎 大一座

舞踊囃子

66 67 68 黒 浪花名物大和屋新曲 二人棒しばり 三 三 南地大和屋舞踊團

1181 1182 赤 大正十三年度新町花踊 三 三 新町廓名妓連

457 468 469 赤 大正十一年度 あし べ 踊 三 三 三 大阪南地名妓連

1178 1179 1180 赤 大正十三年度 あし べ 踊 三 三 三 大阪南地名妓連

1214 1215 1216 赤 大正十三年度北陽花浪踊 三 三 三 北陽名妓連

1530 1531 1532 赤 大正十四年度 あし べ 踊 三 三 三 大阪南地名妓連

1583 1584 1585 赤 大正十四年度北陽花浪踊 三 三 三 北陽名妓連

L 53 1554 1555 黒 都をどり 三 三 三 祇園歌舞會名妓連

尺八及箏曲

1247 赤 （文部省推薦） 追分降りて行く 三十三所御詠歌

1363 赤 春雨 江差追分

1712 赤 六段 今儀修山

62 63 赤 琴曲 千鳥の曲 三 三 立花家扇遊

60 赤 尺八二部合奏 祝の調 新八千代

96 赤 六段 下上 上田流宗家 上田芳憧 竹童 菊平大撿校

97 赤 越後獅子 下上

251 赤 黒髪 下上 菊寺 上田芳憧 大勾當 大勾當

252 赤 八千代獅子 下上

俚謡

497 498 黒 千鳥の曲 三 三 鈴木鼓村 改那智俊宣

435 436 黒 嚴島詣 三 三

175 赤 正調安來節 葉ざくら新玉の 松本三八二

176 赤 安來節 關の五ケ本松ん

183 赤 安來節（わしの生れは 掬に千束の）

184 赤 安來節（ほとゝぎす 色氣はなれて）

185 赤 正調安來節 安來出る時 歌の先生

186 赤 太鼓入 出雲安來 磯節

106 赤 安來節 關の來ケ本松ん 山村出雲 井上壽

188 赤 磯來節 文句入 安來節

74 赤 正調安來節 文句入 安來節（渡邊の綱） （眞の夜中に） 本塲 山村出雲

163 赤 正調 字餘り 安來節 嫁が島田 私も昔は

75 赤 安來節 洋琴入 本塲 渡邊房野 八原秋子

132 赤 安來節 紺の暖簾 涙の音 井上壽

213 赤 正調 安來節 尺八入 わたしが わたしの心は 池内あい子 西田長平

233 赤 正調安來節 酒呑み男は 露にぬれたる 西田長平

214 赤 博多節入 字餘り 安來節 大渉たか子

350 赤 安來節 出雲磯來節 本塲 杉本政子

204 赤 太鼓入 安來節（咲いてほたんと せまい樣でも） 池内あい子 西田長平

261 赤 撥入 安來節 博多節 安來節處名物 石原清三郎 渡邊忠次郎

354 赤 木曾盆踊（ソラホイ）中津節 — 名古屋三新玉家てふ
355 赤 笛入ナカノリサン 大島節 名古屋名物 — 名古屋 廓笛同 小梅
228 赤 徳島名物阿波せきぞろ盆踊 — 徳島廓 米千代小玉 小舟 小遊助 静子
229 赤 阿波盆踊（まいよ〳〵で堅いつめたい） — 遊
322 赤 安來節 お國ばかりか名物 — 高島君江
323 赤 津花節入安來節 花の愛宕に松江名所 — 高島君江
508 赤 （文部省推薦）安來節 天のむら雲春の摘草 — 高島君江
610 赤 安來節 百日咲くてふ名殘惜しんで — 高島君江
295 赤 正調安來節 雪の肌をX光線 — 岩谷雪子 渡邊忠次郎
253 赤 本場磯節 磯で名所は美ましいぞい — 常州港新藤家 小六藤奴
254 赤 本場磯節 磯のあわび漁 — 常州港新藤家 小六藤奴
255 赤 本場磯節 底の知れないあたつて碎けて — 常州港新藤家 小六藤奴 鶴代 小祝
177 赤 小原節 驚ぎ唄 下上 — 小原萬龍一座
711 赤 小原節 下上 — 小原萬龍一座
815 赤 追分 — 阿部せい 安田いそ
235 赤 字餘り安來節 — 新盛團 門脇清次郎 小松原榮吉
205 赤 字餘り安來節（竹に雀は嬶の年を） — 新盛團 門脇清次郎 小松原榮吉
321 赤 正調追分 三下り追分 — 北海道 堀野鳳聲 尺八、塚谷旭堂 三味線
975 赤 尺八入追分 — 神戸共立檢 菊之助 尺八 小山京風
306 赤 安來節 聞らくは私とお前は — 出雲 新川八重子
511 赤 尺八入追分節 小樽の棧橋 鳥もとまらぬ — アイヌ人 ヒラメ 尺八 立化家扇遊
852 赤 伊那節 下上 — 信州諏訪公の家 初代 福松
853 赤 有明節 御嶽節 諏訪節 — 初代 福松
847 赤 安來節 字餘り安來節 — 高田久子

857 赤 山中節 下上 — 古屋 明鶴 小重 三新玉家てふ 廓笛同 小梅
1133 赤 安來節 逢ふて通へばまゝになるなら — たもり桂 喜代の家 日の丸
1185 赤 安來節 花の愛宕山で切る木 — 今別れ道の牛町も角力でなら栃木山
1240 赤 安來節 — 今別れ道の牛町も角力でなら栃木山
1275 赤 安來節 松江大福百日咲くてふ — 今市檢 花奴
904 赤 尺八入 自分 — 尺八 山村豐子 松林周弘
894 赤 正調博多節 — 博多中檢 文唄 糸雪 松松
1259 赤 二板上り新内節 — 博多中檢 文唄 糸雪 松松
1438 赤 博多節 — 博多中檢 文唄 糸雪 松松
1237 赤 御國節、子守唄、どんたく — 博多中檢 文唄 糸雪 松松
1586 赤 串本節 下上 — 紀州熊野串本 玉屋愛吉 珍丸
1159 赤 八木節、米山 小原節入安來節 — 都家 花奴
1328 赤 小原節 八木節入安來節 — 都家 花奴
1562 赤 城崎節 — 升の家鈴子
1365 赤 よされ節 — 登坂美聲
1661 赤 じよんがら節 — 登坂美聲
1217 赤 秋田おはこ甚句節 — 秋田 佐藤貞子 津島壯八
1597 赤 秋田荷方音頭節 — 秋田 佐藤貞子 津島壯八
916 赤 追分 下上 — 樫原北海 安田イソ
848 赤 福知山音頭 下上 — 唄 一井かつ 三味線 一井寺枝 尺八 田中基靖
1629 赤 西行、わ箱、さ八ぎ — 升の家鈴子

54 赤 新デッカ節 — 南地 左馬也 外連中
349 赤 太鼓入芝で大島節生れて — 南地金龍
465 赤 計量宣傳安來節 — 南地金龍
466 赤 同都二上々新内節 — 南地金龍
513 赤 柳千枝咲いてしも — 南地金龍
580 赤 文句入磯節さの — 南地金龍
693 赤 棚の達摩替唄 — 南地金龍
51 赤 人體津綠繪（丸い玉子） — 南地金龍
53 赤 文句入大津繪 — 南地金龍
382 赤 一杯飲めのめ（文句くづし） — 南地金龍
359 赤 柳ヨンガナイ — 南地金龍
154 赤 富士人々々 — 南地金龍
300 赤 新鴨綠江節 — 南地金龍
301 赤 二上新内乃大木 — 南地金龍
302 赤 お前まち〳〵ヒヤ〳〵節 — 南地金龍
351 赤 滑稽詩吟（送別、殘月滿曲） — 南地金龍
352 赤 紺屋の前四季 — 南地金龍
268 赤 潮來出島節 — 南地金龍
206 赤 風に量れ節 — 南地金龍
676 赤 廿四段返し 下上 — 南地金龍
677 赤 梅の春 下上 — 南地金龍
774 赤 我れも通ひて — 南地金龍
167 赤 二上り節 — 南地金龍
182 赤 仙臺名物福知山音頭 — 南地金龍
181 赤 伊山甚句節 — 南地金龍

南地力松・遇

219 赤 大海晏津寺 繪
220 赤 名博古屋多甚句 節
221 赤 憎くらしい浮氣同士櫻見よりて、初出見よりて
277 赤 嬶よかやつれステーコ櫻のほつれ
278 赤 琉球奴さん 節
262 赤 シヨンガイナいざや行きませう
271 赤 持入ゝ鴨は島原江 節
464 赤 計量宣傳鴨綠江 節
946 赤 三下り、二上り
1072 赤 浪花の遊廓失敗女町 行
169 赤 春雨の御庭所の御
170 赤 深川行く節 降りて
171 赤 秋しがの國さ夜わ
180 赤 流行安江來 節 絲
381 赤 十二月上下
316 赤 流しの違の間杖 節
317 赤 五段返しハツトセ
318 赤 咲いた櫻の木に々逸 節
408 赤 鳥追ひし松ゴ
396 赤 青柳山替唄 節
1609 赤 やんれさほいよりをもどして
三味線太細合奏
1091 赤 地唄萬歲下上
1139 赤 都々逸さ
1184 赤 さあ阪やれ四国 節
1163 赤 關の五本松あやれ 節

南地力松連

1273 赤 角力つちよろまかせ 甚句
1320 赤 籠なしのよ 節 鳥
1396 赤 わしが國さ三下り木遣
1662 赤 戀ヶ窪ニスの小舟 唄
1171 赤 追分坂は照るく思へば興作
1709 赤 かんちろりん替雨春 唄
1725 赤 ひんほつ替山館 節 唄
52 赤 十二段音返網頭し
55 赤 大阪四季花所名 涙
284 赤 人のよしあし、主が砧、雪の大津繪（東海道）あしたの
34 赤 十櫻、わが百葉の戀
269 赤 わがトツチリトン都も々逸
147 赤 一口トツチリトン 囃
148 赤 御座附三下都々逸
149 赤 中拔ラツパ名を吉賣 節
150 赤 おや津〳〵大 節 繪
50 赤 金海淡々 節
631 赤 秋夜の新内上り
867 赤 二都上り新々逸内
923 赤 青柳山館 節
1352 赤 大津晏海寺繪
1671 赤 山中國わしが 節
217 赤 里をはなれて、寢なから香の夕涼みの
218 赤 うきす鑒る逸
122 赤 三浦屋高尾太夫さん夜櫻、ひでもめて、仙々と

南地力松連

南地金八

橋家千橋

鹽原秩峰

神戸共立檢玉三郎

南地花龍

中村兵藏 許國六次郎

56 赤 御座附三下々逸 節
57 赤 奴さん川 節
58 赤 五段球返流し 節
59 赤 博多甚句上り新内 節
151 赤 青柳名所
152 赤 鴨綠江ツコラサ 節
287 赤 茄子と南瓜、おつにからんだ甚句角力
288 赤 ゑんけて待てど、掉さいなばせば
279 赤 ヴアイオリン入梅にも自鎗さび
1025 赤 都々逸ツチリトン
1060 赤 雛鶴三下り、高砂、連子日傘、すいたお方 吏
1104 赤 大津繪鎗
1196 赤 御座付、櫻見よりの春日 唄
1276 赤 都々逸
1364 赤 お座附三下文句入都々逸 り
1471 赤 鎗ツチリトン 錆
153 赤 鴨綠江新鳴 節
695 赤 二上り御座附三下 騷ぎ
772 赤 奴さほつくれん
714 赤 常盤津入都々逸
773 赤 本調子ラツパ遣木 節
87 赤 大津々都 繪
893 赤 涙花節入都々逸元 節
1624 赤 浪花節入都々逸
103 赤 米山博多甚句 節

美入千代

大津家とみ子

三遊亭圓若立花家橘樂

山下席重豆

吉原仲ノ町喜代小ふじ治

駒源新橋平瀾

餘興元祖津田清美

君奴

718 赤 浪花節入 追分 都々逸 天中軒雲月

314 赤 新鴨綠江節 一力の世帶

315 赤 源氏節入 新内入 二上り新内 大津繪（八百屋お七）

357 赤 鎗 吹き寄せ、米山甚句

434 赤 句入博多替 ゑんかいな 博多節

5 赤 よいしよこしよ 追分入磯節

936 赤 屋 文津づし繪

964 赤 愚 鎗さ 痴び

1026 赤 ブ 紀伊國 ぼの ら

1058 赤 ほ 安來節入鴨綠江節 ど のよさ 節

1065 赤 淀 寢ながら の川瀬

114 赤 梅 箱は咲いた か八

1218 赤 丹 ぞ後の宮 め津き

1238 赤 館 桑名の殿 樣 節

1277 赤 淺 イ〳〵 く さ も 節

1338 赤 尺八入 茄子さかぼちや かんちろりん

1361 赤 硯 活惚、引き花寄せ 筏

1128 赤 春 深川雨

1445 赤 間 梅に逢も 節春

1483 赤 奴 さの さん

1589 赤 青 二上り新 柳内

1664 赤 稻 薄墨 妻

1109 赤 追 分 上下

1627 赤 博 伊豫 多 節

1702 赤 二上り わしが國さ 新内

山村豐子

594 赤 何ど 榜 し か よ 節 唄 志賀廼家淡海 三味線曾我廼家舞鶴

595 赤 ヨ 成イシヨコシヨ 金節

289 赤 文句入 都々逸 都々逸 水戸新藤家 小六

290 赤 五 節 入月夕 暮雨 つばめ家 燕女 つばめ

358 赤 博 多節 身は町人で 百萬石の 高島君江

361 赤 獅子 奉祝道行囃子 ほんかいな、騷ぎ 名唄 福鶴、小重 古屋三 新玉家長二 廓節同 小梅

679 赤 名 よ 古屋 さ と 甚 句ひ

680 赤 ノ 柄 れ し す ェ 節き

770 赤 大 磯 島 節節

1061 赤 奴 大 さ 津 ん 繪

820 赤 紺 ま の じ 前 ら 掛

870 赤 鴨 え 綠 い 江 ぞ 節前

890 赤 桑 名 山 節節

903 赤 ゑ 湯 ん か 寺 い な

948 赤 都 々 逸

1007 赤 困 新 つ え た ね ぞ 節節

1141 赤 福 知 曾 山 木 音 頭 節

1183 赤 青 二上り新 柳内

606 赤 浮 有 世 明 節

1329 赤 文 ほ 句入 つち 都 よ々 せ 逸節

1397 赤 留 め 上 て り も 歸 新 る 内

1127 赤 鬢 山 ほ 節 つ

1472 赤 雪 推 量 の あ し た 節

1567 赤 博 東 多 雲 節

神戸共立檢菊之助

512 赤 鎗 ッ さ チ び ヨ

578 赤 伊 二上り 樂 節（お俊傳兵衛） 西行

607 赤 我 源花節入 が 都 ま 戀 逸

636 赤 文 五 句入 萬 都々 逸 石

678 赤 黑 髮 下上

775 赤 愚 痴 下上

819 赤 流 し の 枝 下上

876 赤 白 ブ 拍 ぼ 子 ら

38 赤 止 た めて ま も く 歸 ら る や

940 赤 髮 さ つ ほ ま 節つ

984 赤 奴 雪 の あ さ し た ん

989 赤 夕 木 暮 津 替 川 唄

1073 赤 詩 桃 入 米 太 山 郎

1660 赤 博 人 多 津 節 繪

1715 赤 博 文 句入 磯 多 節

117 赤 都 三 々 下 逸 り

144 赤 磯 文 句入 都 々 節 逸

166 赤 郡 二 坐 上 附 り 三 新 下 内

114 赤 桑 か 名 つ ぼ の れ 殿 樣 ぎ

1206 赤 都 々 逸 下上

990 赤 尺 都 八 入 館 々 山 節 逸

633 赤 て 聲 ん 灣 ど ん 節

968 赤 四 春 季 雨 替 替 唄

273 赤 滑 仙 稽 臺 安 大 來 津 節 繪

527 赤 び 鯱 ん 綠 ほ 江 つ 替 節 唄

神戸共立檢 さん入

吉原〆廼家 〃太 〃松

六女の花會

燕家駒之助

神戸共立檢 高八

立花家金之助

526 赤 二上り新内 夏 大久保梅之助
460 赤 大鴨綠島江節 節 神戸共立檢 菊之助
579 赤 二上り髮ほつ猫撫節
604 赤 鴨綠江節
611 赤 博多節
291 赤 夜の原吉深夜の卷 初夜の卷 つばめ家連
1733 赤 都々逸・上り木新遣 内 葭兼町松
1737 赤 む字ら治さき 柴 一井かつ
23 赤 倍增し 下上 桂福團治
107 赤 日和違ひ 下上
138 赤 廻りよりみ 猫湯 林家染丸
164 赤 親子酒 下上
949 950 赤 電話の散財 三四
1137 赤 座頭殺し 下上 露の五郎
263 赤 ひやかし 下上
243 244 赤 三十石 三四 桂小文枝
709 赤 すつこけ 下上
810 赤 三人旅 下上
1083 赤 初天神 下上 柳家小さん
809 赤 布引の產 下上
1083 赤 鍋草履 下上 三遊亭圓右
632 赤 掛取酒屋 下上
649 赤 ヨイ〳〵芝居 下上 談州樓燕枝

653 赤 伊勢詣り 下上
652 651 赤 猪買ひ 三四
286 赤 滑稽二輪加味噌豆
310 311 赤 書割盗人 三四
210 赤 丁稚芝居 下上
356 赤 大晦日 下上
275 赤 近日息子 下上
533 赤 貸家札 下上
127 128 赤 國の手形 三四
826 827 赤 野崎詣り 三四
438 439 赤 紙屑屋 三四
274 赤 ろくろ首 下上
71 赤 天狗さし 下上
72 赤 お日さんの宿 下上
100 赤 舞子の濱 下上
104 赤 ランキー醫者 下上
105 赤 酒のかす 下上
186 赤 菅原息子 下上
187 赤 須磨名所 下上
172 赤 僞浦島 下上
173 赤 浮かれ稽古屋上の卷 下上
174 赤 同下の卷 下上
201 赤 たらちめ 下上
238 赤 宿がへ 下上
370 371 372 赤 親子茶屋 三四

立花家花橘

202 赤 涼み舟 下上
241 242 赤 滑稽怪談尼寺 三四
17 18 赤 反魂香 三四
938 赤 十德 下上
555 556 赤 鱶の魅入れ 三四
953 954 赤 肝つぶし 三四
1044 1045 赤 花色木綿 三四
1155 赤 厄拂ひ 下上
1138 赤 狸茶屋 下上
1189 赤 藝(小妓唄入草) 下上
593 赤 五目講談 下上
1274 赤 いかけ屋 下上
1325 赤 無筆の手紙 下上
1357 赤 浮世床 下上
1496 1497 赤 兒ほめ 三四
1685 1686 赤 鐵砲屋 三四
1698 赤 魚屋 下上
9 赤 惠比須小判 下上
10 赤 刀屋小僧 下上
11 赤 八問答 下上
12 赤 からし醫者 下上
769 赤 商賣根問ひ 下上
811 812 赤 チシヤ醫者 三四
710 赤 馬の田樂 下上
14 赤 逆さま盗人 下上

立花家花橘

桂春團治

973 974 赤 無筆の片棒 三 三
1033 1034 赤 八足 三 三
1048 1049 赤 浮世根問ひ 三 三
1063 赤 正月の枕 下上
1068 1107 赤 靈算 三 三
1168 1169 赤 猫の災難 三 三
1190 赤 試し斬 下上
1203 1204 赤 三人道中 三 三
1211 1252 赤 へッツイ盗人 三 三
1310 1311 赤 婿入 三 三
1358 1359 赤 二番煎じ 三 三
1383 384 赤 反對車 三 三
441 1442 赤 鰻屋 三 三
1465 赤 按摩炬燵 下上
1563 1564 赤 返り討 三 三
1602 1603 赤 阿彌陀池 三 三
1636 1637 赤 居酒屋 三 三
1665 1666 赤 こがれ大黑 三 三
1694 1695 赤 喧嘩の仲裁 三 三
1723 1724 赤 袈裟茶屋 三 三
981 赤 さとり坊主 下上
532 赤 寺のアテモノ 下上
766 赤 慾の間違 下上
1504 赤 結婚の夢 下上
1661 1668 赤 凱旋 三 三

桂春團治

柳亭左樂　笑福亭枝鶴　桂枝雀

雜曲

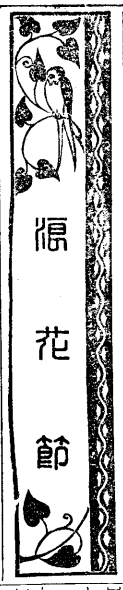
868 赤 鼻れじ 下上 桂扇枝

13 赤 三曲萬歲 忠臣藏穀中及傷 下上 荒川千成
15 赤 阿呆陀羅經 ないものづくし 下上 若松家正右衛門
16 赤 しやべくり萬歲 問答 笑福亭鶴藏 濱ノ一圓
73 赤 輕口掛合噺 勸進帳 下上 伊藤富岳
216 赤 詩吟櫻狩 太田道灌 櫻川小春 伊藤富岳
585 586 赤 祇園長刀鉾囃子 三 三 京都長刀鉾町連中
220 281 赤 ヤンレ節 鈴木主水 三 三 櫻川小春 池島家鶴子
282 赤 江州音頭 島の巢子別れ
598 599 赤 河内音頭 綠の俠客小佛十三 三 三 竹丸二代目 梅吉
358 赤 江戸上り道化萬歲 下上
360 赤 蘆歲新磯節 カラクリ日清戰爭、不如歸節
377 赤 御殿萬歲 下上
378 赤 名古屋萬歲 下上 名古屋 鈴木源十郎一座
437 赤 お伊勢萬歲 下上
583 赤 太神樂 深川 囃
963 赤 太神樂 住吉 おつぼれ踊 豐年齋 梅坊主一行
419 赤 滑稽餅搗 下上
420 赤 滑稽音曲々藝 下上
443 赤 小龜音曲 下上 港家小龜一座
596 597 赤 河内音頭 河内十人斬 三 三 元祖 岩井梅吉
917 918 赤 江州音頭 木津勘助 三 三 櫻川壽樂丸

871 赤 萬歲滑稽浪花節
907 赤 萬歲鳴新綠磯節 江節
939 赤 萬歲博多節 安來節
1026 赤 萬歲數え唄 下上 砂川捨丸 加藤瀧子
1062 赤 萬歲大津安來節繪
1103 赤 萬歲滑稽淨瑠璃 下上
550 551 赤 江州音頭 石川五右衛門 三 三
654 赤 三曲萬歲 忠臣藏殿中及傷 下上
222 223 赤 江州音頭 櫻川五郎藏 三 三
1086 赤 萬歲千兩幟 下上 京都眼鏡一行
1625 16 6 赤 江州音頭 更科武勇傳 三 三
1659 赤 江州音頭 後德丸
383 384 385 赤 都名所盲者引萬歲 三 三 兵 宇治廼家茶樂 信濃家牛玉
626 赤 節句宣傳 極內ダンス 下上 松涙義雄 和歌浦糸子
957 赤 正傳 朝顏日記 雛子
958 956 赤 鳴戸 三 三 唄 卜光 村光子
960 赤 お鶴殺し 今村三喜光 笛 太中村千代次
961 赤 菊萱道心 熱田獅子 詞 唄
1198 赤 カリ節 下上
1307 赤 カリ節 下上 富士山組連
1301 赤 小原節
1258 赤 口技動物の鳴聲 中華民國口技大家 人々笑
1288 赤 掛合噺 滑稽 古屋 下上
1701 赤 掛合噺 滑稽靈坂 下上 木村芝鶴 木村歌蝶

1205 赤 安來節 熊本城
1239 赤 小磯原節
1294 赤 甚川中島句
1249 1250 赤 江州音頭千兩幟 三三
1253 赤 關の五本松博多節
2498 赤 法界安來節磯節
1314 赤 米山節浪花節入、安來節替 ※後獅子
1687 赤 萬歳電車夫婦喧嘩數え唄（テレクサイ）
1705 赤 萬歳即席滑稽洋行談問答
1731 赤 萬歳滑稽玄冶店鴨緑江節
1334 赤 十二ヶ月動物鳴分
1407 赤 博多小女郎浪枕汽車の意見
1732 赤 法界三十三間堂小原節

大阪天王寺浪界呑洲
鎮鑰家好延
高島家連
雁玉の家
初春亭玉輔
江戸家猫八
博多淀助
新之助連



1132 赤 南部坂 上下
1703 赤 赤垣源藏 上下
7 赤 大石少年時代（追分入） 上下
134 赤 南部坂 上下
433 赤 同十番斷 上下
449 赤 （文部省推薦）曾我夜討最後の見參 上下
450 赤 鹿子絞競達引 上下
449 赤 炭部屋 上下
449 赤 （文部省推薦）佐倉の曙 上下

吉田若燕
廣澤菊一文字
龍甲齋虎丸

394 赤 乃木將軍 三三
316 赤 村上喜劍 三三
1123 1124 赤 水戸黄門西國漫遊 三三
231 232 赤 鍼井玄以醫者問答 上下
265 赤 清水次郎長 三三
896 897 赤 水戸黄門九州漫遊 上下
1003 赤 鼠小僧次郎吉 上下
1074 赤 雷電爲右衛門 上下
1309 赤 村上喜劍（米山甚句入） 三四
2 3 赤 赤垣源藏 上下
4 赤 高田の馬場 三三
716 717 赤 俵星玄蕃 上下
825 赤 義士討入 上下
999 赤 南部坂注進 上下
1144 赤 原惣右衛門 上下
391 赤 小山田庄左衛門 上下
1292 赤 お藥献上 上下
1335 赤 赤垣源藏 上下
1368 赤 大石山鹿護送 三三
1729 1730 赤 倫敦土産 上下
102 赤 新派心 上下
78 赤 戀の大西郷 上下
135 赤 赤垣禁酒物語 上下
978 赤 紀の國屋文左衛門 上下
266 赤 鹽原多助愛馬の別れ 上下
303 赤

津田清美
日吉川秋水
天中軒雲月
京山呑風
大和・式部
京山扁造

952 黑 乃木將軍傳 上下
1078 黑 乃・木大將 三三
1079 黑 （文部省推薦）七福落り藝妓幾松 上下
1142 黑 （文部省推薦）山内一豊の妻 上下
1177 黑 （文部省推薦）召集令 三三
1241 1242 1243 黑 幕末餘聞君尾の赤心 上下
1266 黑 日蓮上人 上下
1293 黑 大西郷 三三
1405 1406 黑 伊藤公井上侯洋行談 上下
610 黑 山城屋和助と藤田傳三郎 上下
1716 黑 兒島高德 上下
96 黑 佐倉宗吾 三三
1016 1017 赤 岡野金右衛門 上下
1077 赤 堀部安兵衛生立 上下
935 赤 忠僕直助 三四
1267 269 赤 俊德丸 上下
1447 赤 山鹿護送 三三
1675 1676 赤 赤垣源藏 三四
1046 1047 黑 女武士道 上下
970 黑 安中草三郎（お歌の遺難） 上下
1326 黑 安中草三郎（千住取卷） 上下
1271 黑 忠僕直助 上下
1162 黑 清水次郎長 上下
1125 赤 片岡源吾衛門 上下
1587 赤 一心多助 上下
1711 赤

京山若丸
京山圓十郎
數島大藏

76 赤 佐倉宗五郎 下上 — 廣澤菊春
79 赤 五郎正宗 下上 — 廣澤菊春
101 赤 櫻田快擧錄 下上 — 廣澤菊春
1002 赤 景清 下上 — 廣澤夏葉
813 赤 山内一豊の妻 下上 — 早川小燕平
1143 赤 神崎堪忍袋 下上 — 京山燕柳
1018 赤 堀部安兵衛婿入 下上 — 京山華千代（文部省推薦）
1105 赤 山鹿護送 下上 — 京山華千代
934 赤 大石の生立 三四 — 京山小圓
1019 赤 太石山科藝子別れ 下上 — 京山愛子
1075 赤 堀部安兵衛東下り 下上 — 京山愛子
1662 赤 壺坂寺 下上 — 京山愛子
自189至193 赤 孝子正宗 自一至十 — 京山小圓
212 赤 伊達騷動 下上 — 京山小圓
373 374 赤 伊達騷動續編 三四 — 京山小圓
211 赤 辯慶誠忠錄 下上 — 京山小圓
259 260 赤 忠僕直助 三四 — 京山小圓
304 305 赤 大石と村上 三四 — 京山小圓
534 535 536 赤 由良港山荘太夫 三四 — 京山小圓
576 577 赤 孝子涙の印籠 三四 — 京山小圓
608 609 赤 熘公記 三四 — 京山小圓
640 641 642 643 赤 鬼面山と清水次郎長 三四 — 京山小圓
865 864 赤 中將姫 三四 — 京山小圓

1336 赤 義士引上（文部省推薦） 下上 — 富川松安
1468 1469 赤 田村邸 三四 — 富川松安
693 694 黑 堀部安兵衛東下り（文部省推薦） 三四 — 吉田奈良丸
1412 1413 赤 鹽原多助（文部省推薦） 三四 — 吉田奈良丸
1445 赤 慶安太平記 下上 — 木村友衛
1438 赤 雷電爲右衛門 下上 — 木村友衛
1170 1601 赤 毒婦お清 三四 — 木村友衛
1684 赤 天保六歌仙 下上 — 木村友衛
1170 赤 寛永三馬術 下上 — 木村友衛
1186 赤 櫻川五郎藏 下上 — 木村友衛
1344 赤 （文部省推薦）壺坂（琴入） 下上 — 吉田虎右衛門 東天紅
1126 赤 國定忠次 下上 — 吉田虎右衛門 東天紅
1444 赤 （文部省推薦）琴入 少年武士道 下上 — 吉田虎右衛門 東天紅
1673 1674 赤 玉菊燈籠 三四 — 吉田虎右衛門 東天紅
64 65 赤 （文部省推薦）景清東下り 三四 — 富士月子
98 赤 尾崎富右衛門 下上 — 富士月子
239 240 赤 馬場三郎兵衛 三四 — 富士月子
779 赤 大石關根の對面 下上 — 富士月子
907 909 赤 久留島清次仇討 三四 — 富士月子
1076 赤 三方目出度 下上 — 富士月子
272 赤 柳生二蓋笠 下上 — 日吉川小秋水
1021 赤 大岡裁判鍵屋騷動 下上 — 日吉川小秋水
1404 1405 赤 鼠小僧 三四 — 日吉川小秋水
1213 赤 倉橋傳助 下上 — 桃中軒改メ廣澤若菊
1291 赤 石童丸 下上 — 桃中軒改メ廣澤若菊

1568 赤 （文部省推薦）有馬猫騷動の内孝子與吉 下上 — 桃中軒如雲
1633 1634 赤 秋田土産 祇妃のお写 三四 — 浪花亭綾太郎
1704 赤 越の海勇藏 下上 — 浪花亭綾太郎
1727 赤 天一坊 下上 — 浪花亭綾太郎
1187 赤 鹽原多助 下上 — 敷島辰城
1330 赤 堀部安兵衛生立 下上 — 桃中軒如雲
1446 赤 淺野内匠頭 下上 — 桃中軒如雲
1466 赤 不破數右衛門 下上 — 桃中軒如雲
1565 赤 （文部省推薦）大石妻子別れ 下上 — 桃中軒如雲
1588 赤 村上喜劍（道中附） 下上 — 桃中軒如雲
1677 赤 倉橋傳助 下上 — 桃中軒如雲
1710 赤 隱岐の孤島 下上 — 桃中軒如雲
1717 1718 赤 南部坂 三四 — 桃中軒如雲

966 赤 失戀の藻の花唄 — 西岡喜美子
1212 赤 ヴヒニス夕陽の舟は落ちる唄 — 寺井金春 管絃樂伴奏
895 赤 青籠の春の友唄 — 寺井金春 管絃樂伴奏
1257 赤 ストのント渚唄 — 寺井金春 管絃樂伴奏
1285 赤 紅山燈の唄 — 寺井金春 管絃樂伴奏
1414 赤 スのんレきの唄節 — 寺井金春 管絃樂伴奏
1467 赤 抱ピロットの唄て寢る — 寺井金春 管絃樂伴奏
1566 赤 女護島ヘナチヨコ節 — 寺井金春 管絃樂伴奏
1728 赤 最後の金色夜叉 松の聲 — 寺井金春 管絃樂伴奏

997 赤 燕鈴の 唄 鬪寺井金春前原照子
1688 赤 海夫婦船の頭の 唄 寺井金春鈴木白洋
49 赤 六反池慘初風戀 磯 馬 滑 稽 鳴 緑 江 節 123 赤 馬 賊 い の 唇 唄 875 赤 輕 井 澤 心 曾 根 崎 心 中 947 赤 戀 は 命 の 人 唄 よ 715 赤 枯 れ 涙 す の き 枯 635 赤 流 散 歩 朝 の 憂 し き 盡 36 赤 英 雄 ナ ポ レ オ ン 情 い 415 赤 水 鬪 東 藻 大 の 震 災 花 985 赤 或る夜の豔歌師 下上 1090 赤 惱 め る 薔 女 薇 い 1120 赤 復 テ 興 ナ 節 節 1154 赤 戀 慕 小 城 の 落 唄 唄 1348 赤 大 青 柳 笑 節 節 108 赤 琵 琶 浦 仇 見 ケ 浪 歌 唄 109 赤 汚 ニ ュ ー ラ フ イ ン ケ ソ ン ゲ 世 節 139 赤 來 た 鳴 兄 緑 ち 江 や 節 ん 140 赤 鷺 ヨ リ ヤ ク 祖 會 節 節 165 赤 好 男 婦 子 の 喧 の 夢 華 203 赤 ぼ ん ま か ね ア シ イ ソ ン ゲ 209 赤 愛 片 割 の れ 蝶 唄 215 赤 ヒ ン ゾ ク ぞ 節 818 赤

1685 赤 田 舍 道 頓 堀 の 夜 の 川 娘

寺井金春 鹽原秩峰 坂下信月 新橋駒子 音羽兼羽 高橋銀聲

1599 赤 別 花 れ 園 の の 戀 唄 福井朱冥

956 赤 噫 七 十 號 下上 日東演藝部員

528 赤 柳 谷 觀 音 節 詠 歌 木 場 節 滋賀縣 齋藤隆山

983 赤 尺八入 歸命頂禮地藏和讃 詠歌 尺八山村豊子 松林周弘

三十三所詠歌 898 899 900 901 902 京都念佛講

親鸞聖人大滿御修業 803 下上 眞宗某師

地藏和讃賽の川原 854 赤 下上 某布教師

祭詞 排日問題 奉告祭祝詞 (神樂入り) 1263 赤 下上 住吉神社神官

眞宗東派 經文 1655 1656 1657 1658 赤 中拍子 正信偈 下上 六首引 御和讃 三四 御文 下上 大谷派東本願寺 法務局 川那邊憲正

630 黑 羽 衣 下上 1236 黑 葛 天 城 皷 1714 赤 杜 玉 葛若 624 黑 船 弊 慶 下上 生 一 左 兵 衛 風 光 義 次 郎 高 木 敏 次 郎 森 田 光 風 生 一 左 兵 衛 小 笛 大 谷 口 幸 次 郎 森 高 木 信 利 夫 生 一 左 兵 衛 大 小 森 青 木 信 太 郎

623 黑 葵 上 砧 46 黑 松 風 下上 1038 黑 勸 進 帳 下上 1437 赤 鉢 木 下上 1569 赤 隅 田 川 下上 68 赤 三 井 寺 下上 1400 特 黑 (文部省推薦) 高 砂 下上 1401 特 黑 羽 衣 下上 1402 特 黑 (文部省推薦) 猩 々 下上 1500 特 黑 景 清 三四 1501 特 黑 鐵 輪 下上 1403 特 黑 (文部省推薦) 松 風 三四 1404 特 黑 (文部省推薦) 1431 特 黑 葵 上 下上 1432 特 黑 竹 生 島 下上 1433 特 黑 (文部省推薦) 蟬 丸 三四 1434 特 黑 (文部省推薦) 768 黑 石 橋 下上 生 一 左 兵 衛 森 田 光 風 高 木 敏 郎 青 木 信 太 郎 大 谷 口 幸 次 郎 小 笛

觀世流宗家 觀世元滋

1290 黑 護 國 の 礎 三四 男爵田中義一氏 1246 赤 排日問題 國難に面して 三四 陸軍中將 櫻井傳次閣下 883 黑 少年團に就て 下上 子爵後藤新平氏

宗教

謠曲

演說

講談

969 赤 大震災遭難物語 上下 桂小文治

996 黒 講談大正震災記 三 神田伯山

自1575至1582 黒 清水次郎長（大瀬半五郎卷）（全八枚）

778 赤 滑稽節 非日約問題論 花月亭九里丸

1130 赤 御成婚紀念東宮殿下の卷 上下

1131 赤 御成婚紀念貞子女王殿下の卷 上下

1508 赤 御銀婚聖上陛下の卷

1509 赤 式紀念國母陛下の卷

桂家殘月

語學レコード 定價 販賣 金壹圓貳拾錢

兩面壹枚ニ付キ

赤レーベル 金壹圓四拾錢

黒レーベル 金壹圓六拾錢

特黒レーベル 定價 販賣 金貳圓五拾錢

大阪市住吉區住吉神社南門前
日東蓄音器株式會社
電話 戎長一一二一番 住吉三七一一番

大阪市東區備後町二丁目一番地
日東蓄音器大阪營業所
電話本町一四八〇番

東京市京橋區銀座一丁目五番地
日東蓄音器東京營業所
電話銀座六〇五九番

福岡市中島町四六
日東蓄音器九州營業所
電話一一二八番

九月賣出しレコード

淨瑠璃 時雨の炬燵（八枚續） 豐竹駒太夫 喜劇？（ハテナ） 森律子 帝劇藤間房子（一枚）

新地唄 雪 糸鶴澤才治（二枚） 唄 糸吉 琴 尺六 あい川幸せつ田芳 豆奴滿憧 映畫說明 村の牧場（一枚） 花井三昌

江戸小唄 殘る月、川風（一枚） 筆のかさ 美之助 萬歲即席問答（一枚） 滑稽洋行談（一枚） 掛合噺 滑稽壺坂（一枚） 木村芝鶴 木村歌蝶

哥澤時雨降る（一枚） 附さつまさ 唄 芝滿糸 小唄春雨替唄（一枚） 芦の家雁玉 初春亭玉輔

浪花節 越の海勇藏（一枚） 浪花亭綾太郎 小唄 かんちろりん替唄（一枚） 南地力松

浪花節 隱岐の孤島（一枚） 桃中軒如雲 小唄 わしが國さ（一枚） 內山村豐子 二上り新

浪花節 二心太助（一枚） 獨唱 FAUST.（ファウスト）（一枚） AID A.（アイダ） 歌 ヌタ、ルビニ

浪花節 赤垣源藏（一枚） 吉田若燕 シロホン獨奏 銀鈴（一枚） 軍艦マーチ

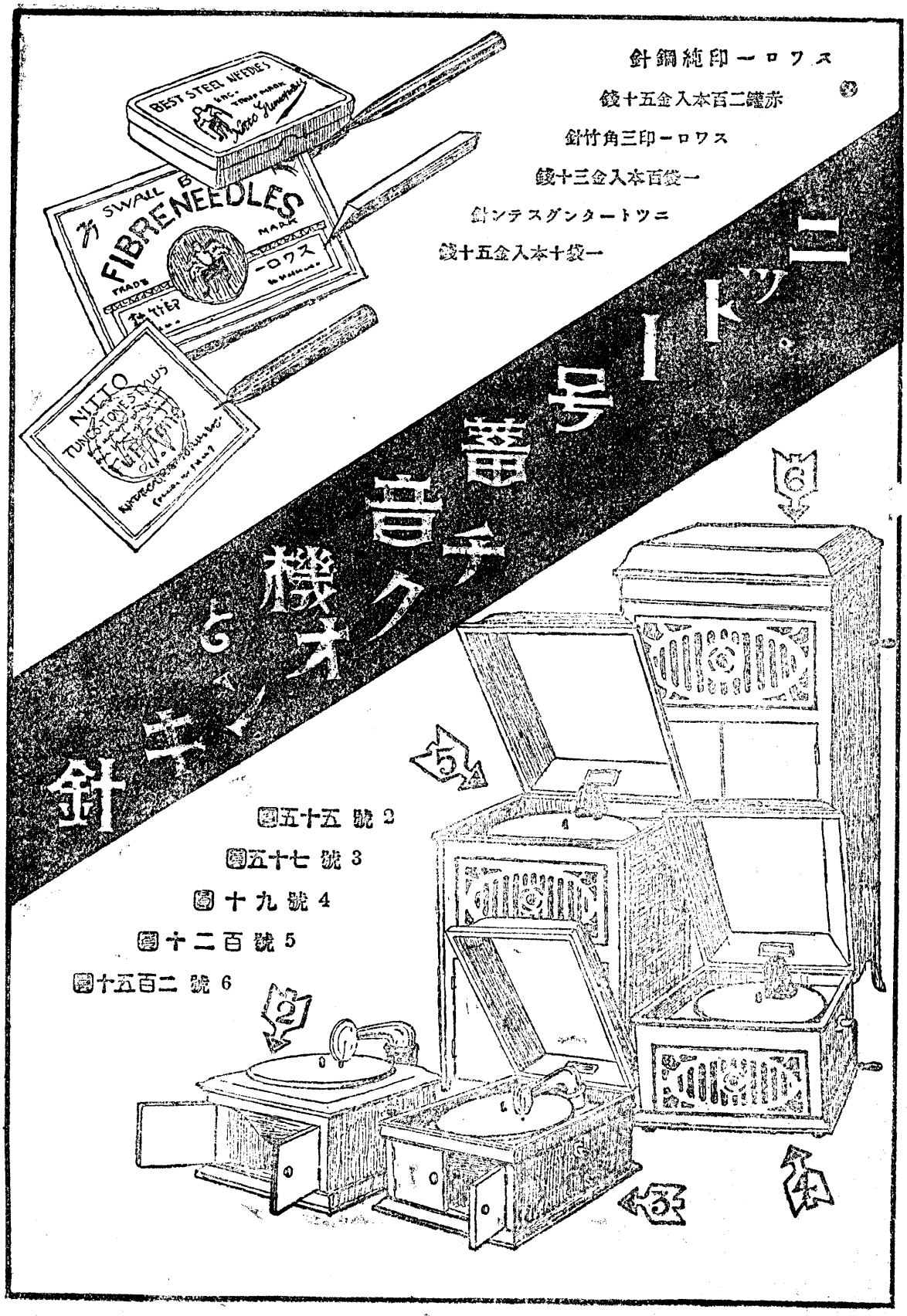
落語 喧嘩の仲裁（二枚） 桂春團治 雀の囀り（一枚） 龜井湘南 管絃樂伴奏

落語 魚屋（一枚） 立花家花橘

筑前琵琶 太田道灌（一枚） 法明山秋根旭惠 英語唱歌 Little Bo-Peep. Goosey Goosey Gander. The Alphabet. The Three Little kittens.（一枚） Ding Dong Bell. Pussy cat, pussy cat.

尺八 六段（一枚） 今儀修山 ドローン ポーマ

ツバメ印ニットーレコード


針鋼純印ーロワス
錢十五金入本百二罐赤
針竹角三印ーロワス
錢十三金入本百袋一
針ンテスグンタートツニ
錢十五金入本十袋一
BEST STEEL NEEDLES
SWALLOW
FIBRE NEEDLES
ロワス
竹印
NITTO
TUNGSTONE STYLUS
ニットー
蓄音機オルゴール
針
號五十五 2
號五十七 3
號十九 4
號十二百 5
號十五百二 6
1
2
3
4
5
6

觀世元滋先生吹込
第三回番謠音譜

俊寛

全一番六枚續
堅牢サック入リ
袖珍稽古本添付

九月十五日より發賣

會費御拂込方法を左の二種と致しますから御便宜上いづれを御選び下さいましても宜敷う御座います。

（甲）入會金として金參圓の御送金を受け、殘金を左記の代金引換としてレコードを發送致します、但し此金額中には書留小包送料の外引換の手數料が加はつて居ます

內地　金拾貳圓五拾九錢、滿鮮台樺　金拾貳圓九拾錢

（乙）左記金額御拂込みの方にはレコード出來次第書留小包にて御送り致します

內地　金拾五圓五拾四錢、滿鮮台樺　金拾五圓八拾五錢

觀世流謠曲音譜會

大阪市東區松屋町農人橋角　電話東六六五番　振替穴阪六七七番

東京市牛込區市ケ谷仲之町四六　電話牛込五八二五番　振替東京七〇六七八番

既製音譜

第一回
熊野

全一番九枚續
金廿貳圓五拾錢
送料　內地金六拾參錢　滿鮮台金九拾錢

第二回
田村

全一番六枚續
金拾五圓
送料　內地金五拾四錢　滿鮮台金八拾五錢

大ドリ印刷株式會社
松江市末次本町
原田明訂庶蓄音部